

「共に生きる」を考える W Project Paper 2013年 改訂版

著者	和光大学現代人間学部身体環境共生学科，野中 浩一，堂前 雅史，矢田 秀昭，大橋 さつき，上野 隆生，小林 正典，小林 芳文，澁谷 利雄，最首 悟
出版年月日	2013-05-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003010/

「共に生きる」を考える

2013 年 改訂版

Project Paper



VOL.1~4 合冊号+α

現代人間学部 身体環境共生学科 (W 学科)

W 学科が秘める可能性の発掘を

～ W 新聞合冊号増刷に寄せて

本冊子は、2009 年度に和光大学教育重点充実事業として実施した「包括的共生概念の構築」というプロジェクトに合わせて発行した 4 号の Wpaper（通称 W 新聞）を下敷きに合冊・加筆改訂したものです。

W 学科にはさまざまな期待を抱いて入学してきた学生さんたちがいます。そうした在学生の人たちも、もう一度、自分たちが選んだ場を見直す手がかりにしてくれるといいなと思ってこの冊子を編集しました。現在は過半数の学生さんが入学時には保健体育教員の資格取得を希望しています。教員になるには資格が不可欠ですから、本気で教員を目指す人は全力で取り組んでください。

しかし、その一方で、W 学科全体を見渡せば、小さな学科であるにもかかわらず、目指している射程は広いのです。保健体育教員志望であっても、地域との交流や環境へのまなざしや、体育大学にはない幅広い教養を備えた、ひと味もふた味も違う人材として社会に巣立ってほしいですし、職業としての教員は

ちょっと違うなと考えるようになったとしても、選択肢はいろいろ探ることができるはずです。そもそも W 学科の核心は、人や環境や文化など、幅広い《異質なもの》との共生に興味はあるが、自分が社会のどこから求められているかわからないという段階の若い人たちを刺激する場となることです。そうした学生さんたちをもっと多く迎えたいと考えています。

2009 年度に W 新聞を作成してからすでに 4 年の月日が流れ、学科の卒業生もすでに 3 世代が旅立ちました。さまざまな進路の卒業生たちがいます。在学生たちにも、入学時から想像もできないような変化をしている人がいます。今回の改訂では、そうした人たちの情報や、学科の日常をもっと伝えるためのページを追加しました。在学生も、これから W 学科への進学を考える人も、ひとつの手がかりにいただけると幸いです。

2013 年 5 月
身体環境共生学科
学科長 野中浩一

目 次

W 学科が秘める可能性の発掘を	2
W paper Vol1 (2009 年 5 月)	3-10
NEW! プロジェクトの成果	8
NEW! 表紙の写真解題	10
W paper Vol2 (2009 年 7 月)	11-18
NEW! 鶴見川で活動している和光大生たち	16
W paper Vol3 (2009 年 8 月)	19-26
NEW! 学外から求められる活動へ	24
W paper Vol4 (2010 年 3 月)	27-34
NEW! 新しい共生社会の市民になるために地球を知ろう	32
NEW! W 学科 学びのモデルと進路	35
NEW! 写真でたどる W 学科の春夏秋冬	36-37
NEW! 多様な卒業生たちの活躍	38
NEW! 学科ホームページあります!	39
NEW! キャンパスの足もとにある豊かな自然	40

「共に生きる」を考える

VOL. 1



Project Paper

ユー アンド ユー
You & You

【巻頭言】

W-Project Paper 発刊にあたって

【定例研究会より】

生きものとの共生？ 生きものから見たら？

【私のオススメ】

生涯スポーツを考える
一岡上ウォーキングとからだー

【研究室だより】

～大橋研究室編～

【1枚の写真から】

ネパールのフクロウ

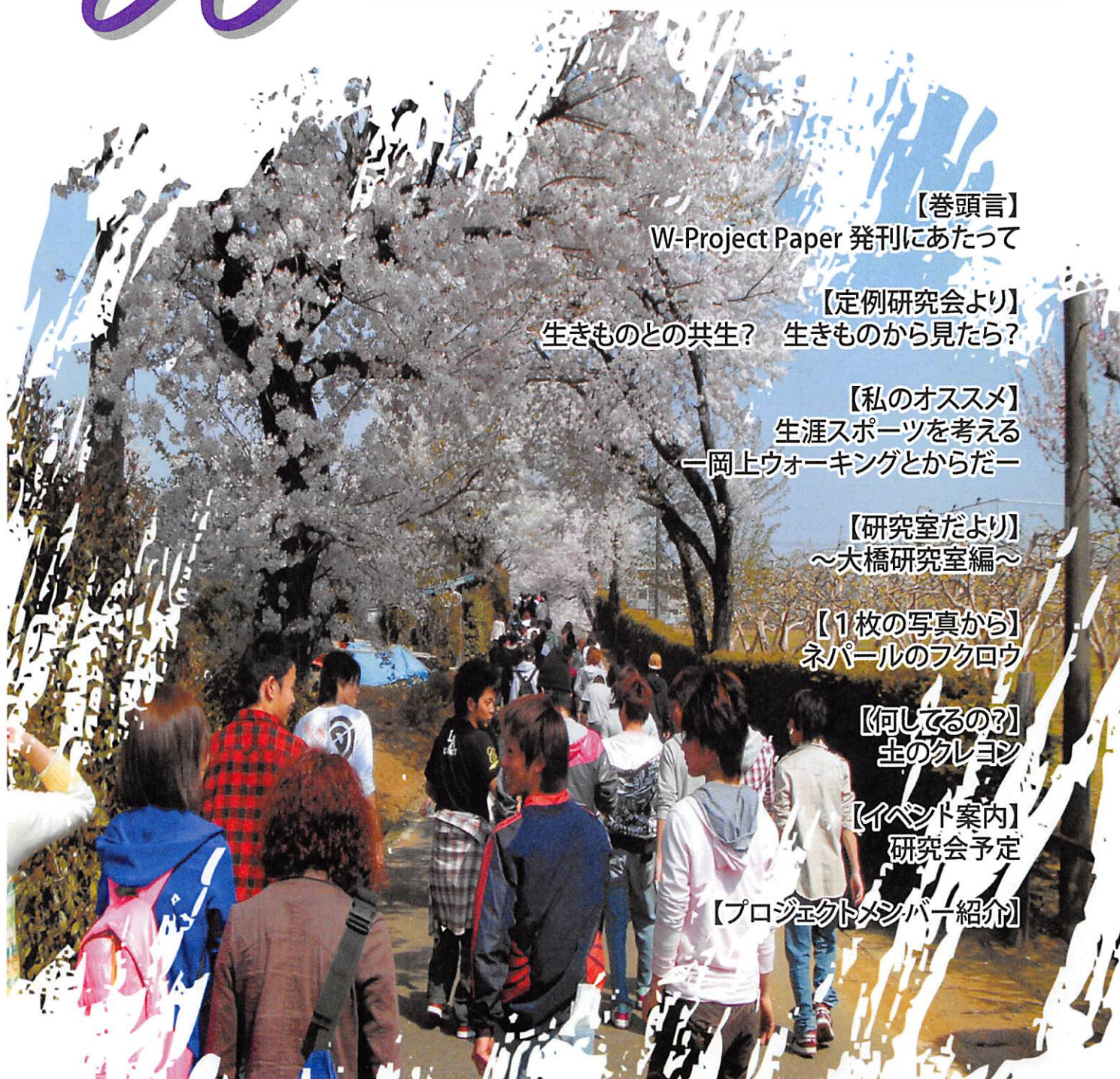
【何してるの?】

土のクレヨン

【イベント案内】

研究会予定

【プロジェクトメンバー紹介】



【巻頭言】

W-Project Paper (Wプロジェクト新聞)の発刊にあたって

身体環境共生学科 学科長 野中 浩一

★ Wに寄せる想い



これは和光大学の公式ロゴ。もちろん、Wako という英語表記の頭文字の W をデザインしたものです。つまり、和光大学=W 大学。身体環境共生学科は、その W 大学のなかで、さらに W 学科という略称で呼ばれています。W のなかの W というわけです。専任教員が8名という身体環境共生学科は、こじんまりした小さな学科ですが、今のところはおそらく全国でも本学だけにある学科で、名前からはそれが何をやる学科かはよく知られていないでしょう。それに、どうして W なのかも、すぐにはピンとこないかもしれません。

学科の核にあるキーワードは「共生」です。「きょうせい」という音は、「強制」とも「矯正」とも書けるので、誤解されることを恐れているのですが、学際的で間口の広い学科で、少人数ながら教員の専門分野は相当に幅広く、そこを貫くひとつの言葉は「共生」しかない私たちは考えましたし、集ってくれた学生たちとともに考え、実践していきたいのが、まさに「共生」に他ならないと考えています。

和光大学には学科名をアルファベット1文字で略称する伝統があります。アルファベットは26文字しかありませんし、過去に使われてきた文字は「永久欠番」になりますので、それほど自由に命名できるわけではありませんが、学科の英語名称を考えるなかで W が選ばれました。「共生」という言葉は単純に辞書を引けば coexistence とか、commensalism とか、symbiosis とかいったものが書かれていますが、どうもピンとこなかったんですね。私たちが目指しているのは、さまざまな意味での「良い状態 wellbeing」ではないか。自らの身体の wellbeing、さまざまな身体をもった他人との wellbeing、地元の人たちや環境との wellbeing、もっと遠くの異国の人たちや異文化との wellbeing、それが私たちの学科の共通部分なのではないか。そうした視点でものを考えて学生時代に学んでいくことが、社会に旅立っていく学生にとっても大事なことだろう。そう考えています。

そうした想いをこめて、学科名は、Department of Human and Environmental Wellbeing となりました。

★ Wプロジェクトの始動

この新聞は、私たちが「W プロジェクト」と通称している2009年度の活動の一環として創刊されたもので、本年度に4号まで出すことを目指しています。このプロジェクト、正式には



和光大学の教育重点充実事業の「包括的共生概念の構築」という名称で採択されたものです。学科の専任教員8名で出発し、本年度前半期はそれぞれの教員の報告による月1回の研究会を重ねながら、秋には共生をテーマとしたシンポジウムを開催する予定で、最終的な成果は、学生たちの副読本か教科書になる形での出版を目指しています。しかし、学科教員の枠にとらわれず、さらに広い視野から「共生」を考えていきたいと考えていますし、それが事業の本来の趣旨でもありますので、ご関心がおありの方は、是非とも研究会にもご参加ください。わざわざ「包括的」とうたっているのは、「共生」がそれほど幅広く、人によって見方が異なりうる概念だという自覚があるからです。

研究会はいわば学術的な共生学の追求ともいえますし、教科書として成果が結実すれば教育にも還元できるはずですが、このプロジェクトは教育事業であり、学生との interaction もとても重要だと位置づけています。ですから、限られた予算とマンパワーではありますが、それぞれの教員が企画する共生イベントもいろいろ展開したいと考えています。この新聞や Web などでご案内することもあると思いますので、ぜひご参加ください。教育といっても、教員と学科学生だけでなく、職員の方、地域の方、などなど、多くの立場の方に参加していただけることを願っています。それが「共生」であり、ほんとうの「教育」とも思えるからです。

★ 共に生きることは簡単ではない

W はダブル U、つまり U and U、you and you です。あなたたちも、あなたたちも、みんなが違ったまま、共に生きることは、きっと人生にとって大事なことなのでしょう。ただ、「みんな違って、みんないい」という標語を実現するのはそれほど単純なことでないことも自覚しています。ただ違いを許容すればいいのだ、というだけで結果が得られるとは考えていません。そもそも「共生」が共生学という学問として成り立つのか、胡散くさく感じられる人もいらっしゃるでしょう。それが「学」になれるのか、そもそも「ology」となるのに必要な客観的論理性でどこまで論じられるものなのか、まだ答えは見えていません。論理を超越したかに見える学生たちの伸び伸びとした日常とともに考え、実践していくつもりです。ともかく、元気のある学科で、それが自慢です。ご注目いただければ幸いです。



生きものとの共生? — 生きものから見たら? —



堂前 雅史

2001年に和光大学に赴任した私は、翌年度からフィールドワーク授業を担当し、学生と一緒に和光大学が面する川崎市麻生区岡上（おかがみ）地域や鶴見川流域を歩いて、次々と珍しい動植物に出会いました。自分の足もとの自然をまるで知らなかったことを、ひたすら恥じ入るばかりでした。特に学生が希少魚ホトケドジョウ（環境省レッドデータブック絶滅危惧 IB 類）を発見したのは驚きでした。それも宅地化された大学周辺に残されていた小さな湧水にいたことは印象的でした。和光大学の周辺は地形が改変されておらず、小さくとも湧水や斜面林が意外に昔のままで残されていたのでしょう。逆に農地や森であっても、地形が改変されていたり、湧水が暗渠化されていたりすると、自然が豊かに見えても、生きものには住めない場所になっていたりします。

ここで生きものから見た世界というものを考えてみる必要があります。ユクスキュルという動物学者は『生物から見た世界』（岩波文庫）の中で、「環世界（Umwelt）」という概念を提唱しています。生きものは、それぞれの種ごとに異なる感覚器官をもって自分の周りの世界を感知していて、周りの世界に異なる意味をあたえて、自分の世界を構築しているのです。ユクスキュルは、それをどの生きものにも共通な客観的なものとして使われる「環境」という語で呼ぶのではなく、「環世界」と呼んだのです。

例えば、私たち人間は紫外線を見ることはできませんが、モンシロチョウは紫外線を見ることができます。

私たちはモンシロチョウの雄と雌の翅（はね）を見比べても違いがよく分かりません。しかしモンシロチョウの翅（はね）は、雄と雌で紫外線の反射率が異なります。そのため、紫外線が見えるモンシロチョウには雌雄の姿は白と黒ほどの違いに見えます（図1）。つまり同じモンシロチョウの雌雄を見ている、我々人間とモンシロチョウはまるで異なるものを見ていることになります。おそらく、自分の周りの世界は、私たち人間とモンシロチョウでは全く異なって見え、全く異なった意味を持っているのでしょう。つまり、生きものによって異なる環世界に住んでいるということになります。

同じように都市空間を見ている、「人間だけが住むための空間」として信じている私たち人間とは異なる環世界の住人である生きものには、まるで異なって見えるはずです。近年、岩場に営巣するはず野鳥が、コンクリートを岩場に見立てて住む込み、都市鳥化することがあります。彼らの環世界では都市が立派な営巣最適地に映っているのでしょう。

和光大学キャンパス周辺は緑が多いとはいえ、ほとんどが宅地です。我々は人間が住むべき場所と思っています。しかし、人間以外の生きものの環世界から見ると、時には彼らに好適な住処を提供していることがあります。

人間と生きものの共生は、そうした視点で考えてみる必要があります。

（著作権保護）

図1 モンシロチョウの雄（上）と雌（下）
右図は紫外線フィルターを用いて撮影したもの。人間がと左図のように見えるが、モンシロチョウが見ると右図のように違って見える。

生涯スポーツを考える

ー岡上ウォーキングとからだー

毎年、身体環境共生学科では4月のオリエンテーション期間中に、新入生を迎えて岡上地域を散策するウォーキングが開催されています。その企画書では「春です。自然が残る和光大学周辺岡上地域を探索し、春の香りをゆっくり楽しみながらちょっと隣の人と観歩や歓歩をしましょう。また学科が学生と取り組んでいる環境保護活動を知っていただく企画です」と紹介しています。

岡上地域は、自然とともに人が生活している気配が感じられる環境にあります。山の中の奥深い、手つかずの自然の中を歩くのではなく、自然と人とが共存している所を歩いています。野鳥の鳴き声や川の流れる音が聞こえ、新緑や紅葉が眺められ自然に接することができます。さらに農道を歩き農業の風景を感じ取ることもできます。ウォーキングは、年齢、性別、生活のスタイルに関係なく、私たちにとって必要な欠くことのできない動作です。特に歩くことは移動のための基本動作であり、生活行動としての買い物、通勤、通学、散歩などに必要な動作です。

スポーツライフ・データによると「運動・スポーツ種目ごとに週2回以上定期的に実施している愛好者」は、推定人口で「散歩（ぶらぶら歩き）」が1,738万人、ウォーキングが1,213万人ともっとも愛好者が多いことが明らかになっています。その背景には生活習慣病や体力低下を改善する上で、日常生活における健康づくりの重要性がますます認識されてきているからでしょう。



直立2足歩行を生活の基盤とした私たちは、心臓や筋肉を絶えず鍛えなければいけない状況を生みだしています。からだは頭を含む上体の重さを骨盤で受け止め、それを腰から下の脚部で支えることとなります。体重が60kgの人は片足に30kgづつ負担を負うこととなります。ヒトが直立し歩行するためには脊柱起立筋、大殿筋、下肢の筋肉など多くの筋肉が動員されます。それらの筋肉には、こぶし大の小さな心臓から、休んでいる時も毎分4~5Lの血液を送り出しています。1日に10万回も拍動し、8トンもの血液を送り出しています。ドラム缶にして40本分にもなります。1ヵ月ではおよそ240トン、奈良の大仏様と同じ容積になります。激しい運動になると毎分15~25Lの大量の血液を送り出さなければならなくなります。

血管の長さは約10万km、地球を2周半するほどの長さになります。中高年齢期になれば健康を維持し躍動的に歩いたり、走ったりするためには、心臓を鍛え、脚を鍛え、背中とお尻の筋肉を鍛える必要が生じることになります。電車、車、オートバイ、自転車など便利な移動手段を手に入れ、日頃歩くことが少なくなった今、意識的に歩くことを継続することは困難なことです。しかし、歩くことによる刺激でからは絶えず反応します。からだの変化、四季の変化、仲間との交流などウォーキング中に発見できることは限りなく多くあります。

(矢田 秀昭)

仲間とちょっと岡上に
脚を伸ばしてみましょう。



和光大学身体環境共生学科、大橋研究室では、「共生」の時代における身体とコミュニケーションのかかわりについて、各自が興味を持ったテーマで調査研究や創作活動を行い、それらを仲間と共有しながら 理解を深めています。実際に、動き、感じ、触れ合いながら、様々なつながりの中で、体験的に学ぶことを大事にして、自分の身体に向き合い、身体の声(ノイズ)を聴き取り、身体で感じたこと、身体で理解したことをゆっくりと考え、語り合って、言語化していくための場を自分達で創る挑戦を続けています。そんな大橋研究室のメンバーがこの春、体験した「共に場を創る」試みを紹介します。



研究室だより ～大橋研究室編～

△さがまちコンソーシアム大学公開講座で学生達が活躍！▽

さがまちコンソーシアム大学が主催する公開講座「からだ遊ぶ・こころが踊る・共に創る」に一緒に創るうーみんなどのダンスパフォーマンス(2009年3月14日、相模原市民会館において、大橋研究室の学生達が企画運営に挑戦しました。当日は、様々な年齢層から40名以上の市民の皆さんが終始笑顔で参加してくださいました。「ムーブメント教育・療法」の理論をもとにしたダンスムーブメント中心のプログラムで、身体でコミュニケーションすることの楽しさを実感できるような内容を準備しましたが、即興的な遊びの活動の中から、自由なダンスパフォーマンスを創り、互いに共有しながら、身体で自分を表現すること、そして、他者と共に場を創ることの大切さについて実感することができたのではないかと思います。

なお、この講座は、全国レベルのダンスコンクールで受賞した2つの作品の再演を含む舞台公演「和光大学Dance Performance Project Merry Zome 009 *花*」(2009年2月24日、相模原市市民ホールとの連携企画となっており、舞台上に立つ学生達が「花」をテーマに新たなダンスパフォーマンスを市民の方と共に創りあげました。また、大学職員の山中ひろさきがキーボード演奏で参加してください、温かい音楽の応援で、場が活き活きしました。あらためて、地域と大学の連携の意義を感じました。

△川崎・しんゆり芸術祭2009にて「旅にでちゃった」やっちゃった！▽

「芸術のまち」を掲げる川崎市麻生区の小田急線新百合ヶ丘駅周辺に集積するホールが連携して、2009年GWに「川崎・しんゆり芸術祭」愛称「アルテックしんゆり」が展開されました。大橋研究室を母体として活動を展開しているMerry Zomeは、昭和音楽大学、日本映画学校、玉川大学と共にこの芸術祭を招待いただきました。「学生達の競演」と題した企画に戸惑いを感じつつも、ならば、和光大学らしい、地域の芸術祭らしい舞台上にしよう！と話が盛り上がり、「旅」をテーマに、随書のある子ども達も含む市民の皆さんや観客の皆さんと共に舞台という場づくりを楽しもうということになりました。

初めての試みで、全てが手探りでしたが、公演タイトルでもある「旅にでちゃった」を台言葉に皆楽しんで取り組んでいました。本番の5月2日(土)、川崎市アートセンターアルテオ小劇場は、子どもからお年寄りまで満員のお客様の熱気に包まれ、お祭りのような一日が終わり、様々な人達が共に存在し合う「場」を自分たちで創る取り組みそのものが混沌としており、正直なところ、様々な点で課題が残りました。しかし、同時に、確実に新しい世界の予感がして、各々に何かの「種」のようなものが宿った不思議な場が生まれたのではないかと感じています。

学生達の舞台活動を見守ってくださいたい和光学園理事長 長谷川 静子先生から感想をいただきましたので、紹介させていただきます。

5月2日新百合台での公演、充実した出来で楽しく嬉しく観ました。

2月の「花」連作も題名にふさわしくキレイにまとめでいて好ましかったけれど、今度のは、スケール大というか、出演者が多彩多様で若さいっぱい、中でも最初から最後まで幼児・赤ちゃんまでが一緒になのは予想外で驚きました。自然な形でお母さんたちも！ 考えてみるとダンスムーブメントとしては当然あるべき姿なのだと気づいて、次々の変化を充分楽しみました。

卒業生を含む全力發揮だったのだでしょう。地域の芸術祭だからこれが本場の姿で、その意味でも貴重！ 見たえのある作品と思いました。

そういえば「かわ道楽」の実践も同じ理念に立っていることに気づき、共に大学にあるべき姿を体現しているのだ、というそう大切に思いました。

卒業生が加わる意味とも関わってきますね。私には見分けもつかない若々しく元気な動きで、当方も若い力をたしかにもらった喜びで明日への薬になりそうです。

(中略)

連休入口の土曜日だけど満員で、和光関係者もあちこちで見かけました。

私も本当に行ってきた。ありがと。そして機会があったら大橋セミの皆によるしく、感動したと伝えてほしい。

「旅にでちゃった」は一見奇妙な題名だけど、中身ビタリで広がりとお祭りがあり、誰をでも容れる良い命名と分かったと伝えてほしいですね。

セミのあるメンバーがあれこれ揃っているんだな。

皆元気で、またね！

現在、このようなお手紙やアンケートに残された観客の方の感想や参加者の体験談をもとに、「旅にでちゃった」で起こったことは一体何だったのか...について、少しずつゆくりと語り合っています。

(大橋いづみ)



【1枚の写真から】



ネパールのフクロウ



3月末に、フィールドワークの下見のためにネパールを訪ねました。これは宿泊したホテルで見つけたフクロウです。むこうも私を見えています。なんと朝8時過ぎです。夜行性とはかり思っています。たが、朝も行動するんですね。ホテルのオーナーから昨夜、「ホテルの庭にフクロウが時々やってきますよ」と聞いたばかりでした。ネパールやスリランカでは、日本と比べて人間と鳥の距離が近いといえます。

たとえばスズメは、スリランカでもネパールでも縁起の良い鳥とされています。スリランカでは、玄関や居間、店先などに用意された果箱でヒナを育てている姿をよく目にします。ネパールでは、外壁のレンガを数ヶ所はずして窪みにして、巣作りしやすいようにしています。もっとも、距離が近いがゆえにわずらわしいこともあります。窓を開け放っているとカラスが侵入して、台所の食物をさらっていくことがあります。ハトが教室のなかに巣作りしてしまいます。

こうした近さは、仏教やヒンドゥー教にみられる不殺生を重んじる生活態度や、より良い来世を求めて布施をして功德を積み慣習からくるものと思われま

す。肉眼で十分です。

【何してるの?】



土のクレヨン



まずはさわってみよう！
大学のキャンパスがある地域を偏愛する学生さんは、勝手にいろんなことを始めるので面白い。研究室に色とりどりの土がにわかに広げられ、いったい何が始まるのかと思ったら、この土でクレヨンをつくるんだそう。色とりどりに見える土もじつは全部、和光大のキャンパス内から採取したものだ。地域との共生も、カエルを捕まえてみたり、土をいじったりするなかからはぐくまれたりする。いきなり理念から入らないところがいい。では小学生のお遊びかというと、和光にはこんなときにちゃんと専門的に製作指導できる教員もいて、油っぽいものやら、パステル調のものやらの作りわけまでしっかりと教わっていた。

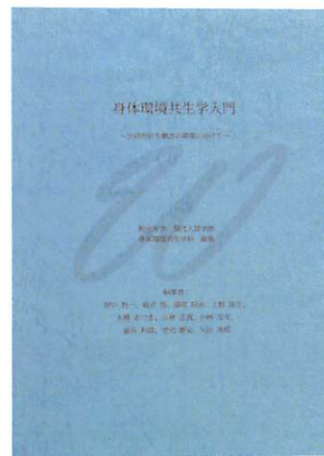
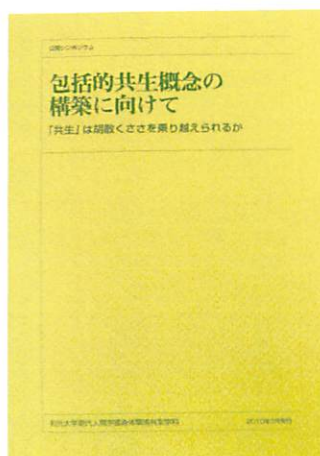


(野中浩二)

NEW!

プロジェクトの成果

2009 年度のプロジェクトの成果は、学科紀要別冊としての『包括的共生概念の構築に向けて』(左)と、学科の準教科書としての『身体環境共生学入門』(右)という2冊の印刷物としてご覧いただけます。いずれも Web でもダウンロード可能です。冊子体をご希望の方は学科教員までお問い合わせください。



(プロゼミの準教科書)

「包括的共生概念の構築」現プロジェクトメンバー紹介



上野 隆生 (近代日本研究)

2008年度は「学外研究」で、主にドイツにいました。イタリアにも足を伸ばしました。昨年の夏休みには、イタリアのシチリアにあるアグリジェントという古代遺跡を訪れました。写真はそこに撮ったものです。最近、ドイツ・イタリアや日本のさまざまな風景を通じて歴史を考えてみようとしています。昨年度に撮ってきた写真のいくつかは、「観光と共生の歴史」や「戦争と遺跡」といった授業の中でも使い始めています。



小林 正典 (観光とそれに伴う諸問題)

最近、ローカル・ルールやエコツーリズムのテーマを中心に、観光開発と環境保全の両立という問題を研究しています。実情は現地に行かなければ分からないので、ダイビングの可能な場所では必ず潜って海の状況と生物を観察し、馬に乗れる場所では自然にダメージを与えないようホース・トレッキングで森林、湿地、海岸を散策するように心がけています。潜ったり馬に乗ったりするには、ある程度の訓練が必要になりますが、一定のスキルを習得したことで、研究の範囲は大きく広がりました。これからもいろいろな地域で身体を活用した現地調査を継続していきたいと考えています。



小林 芳文 (発達運動学、特別支援教育学、ムーブメント教育・療法学)

2009年度から和光大学に赴任しました。趣味は、沢山あり、テニスは何十年も続けています。イタリアのオペラ、カンツォーネをカーク歌うこと、テナーサックスでの演奏などです。30年以上に渡って、障害児(者)の神経心理学アプローチであるムーブメント活動プログラム、アセスメント、遊具開発の実践研究をしています。子育て支援、療育特別支援教育に新しい風を送ることができ幸せです。



澁谷 利雄 (文化人類学、南アジア現代史)

主にスリランカの文化研究に携わってきました。インドやネパールにも足を伸ばしています。祭りや民間信仰、食、大衆文化、民族紛争などをテーマにしてきました。最近、人間と鳥の関係や、休憩所(休泊所)に関心をもっています。また、スリランカで沿岸保全のためにタコノキ植林のNGOにかかわっています。スリランカ野鳥観察会会員。



堂前 雅史 (動物行動学、科学技術社会論、環境倫理)

講義では生物学や生命倫理を教えますが、同時に学生と一緒に鶴見川流域で自然保護活動などを行っています。和光大学周辺の生きものと地域社会の面白さ、そして何よりも和光の学生の個性の面白さにハマっています。「道楽」と称して学生と一緒にいろいろな面白いことをしていたら、最近「地域貢献」といって褒められるようになり、いささか驚いています。和光には昔の大学が持っていた不思議な輝きがあります。



野中 浩一 (公衆衛生学、胎児期環境学、双生児研究)

学生から色紙を頼まれたりすると「Be nice and happy」とよく書いていました。気持ちのよい人間でいような、というくらいの意味です。多少は見栄もまじった、エラソーな言い方をしたのですが、なんのことはない、「うん、お前たち気に入った」と言ってもらえる資質は、そもそも学生のほうがずっと多くもっていることに気づかされています。そんな私の現在の共生課題は、文字通り、病んだ老親と日々どう共に生きるかです。



矢田 秀昭 (運動生理学、バイオメカニクス)

「髪」あたまの毛はなが〜い友だちですがやばいぞ!! メタボがやばい!! 目がやばい!! 肩がやばい!! 記憶がやばい!! ブラックアウトやばい!! ああやばいところだらけだ!! しかし今年もめげずに富士登山、ダイビング、キャンプ、クライミング、ウォーキング、トライアスロンと躍動性を求め走ります。「静」かに自然の音にからだを預ける瞬間があるからこそ「動」が生き生きと感じられます。



大橋 さつき (身体表現論、ムーブメント教育・療法)

いよいよ本番!と舞台直前に気入れをするときも、ムーブメント教室で子ども達と一緒にダンスを楽しむときも、皆が顔を見合せて「わ」になる瞬間がとても好きです。「生き物」としての「場」がそこにはつきりと現れ、同時に、一人一人の身体からもエネルギーが感じられるからです。個の命とは別に私たちが生きる「場」の命があって、私達は二重の生命を生きている…。学生達と、「共に場を創る」喜びを味わいながら、そんなことを最近ずっと考えています…。

— 表紙の写真解題 —



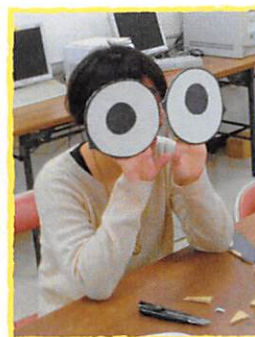
見えてしまったのが
ことの発端



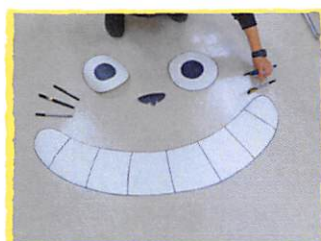
たしかにいます、「和光猫」



とりあえず
ロケハンして・・・



絵心ある才能を
たき付け・・・



教員も工夫し



撮影本番！



意外に難しい・・・



合間には遊んだりしつつ



ミッション完了
と相成りました

遊んでいるように見えるかもしれません。

でも、楽しみながら、さまざまな才能を集めて、一つのことを気持ちよく成し遂げることは、
案外、社会に出てからも必要なスキルかもしれませんよ。(野中)



Project Paper

VOL. 1

2009年5月26日 発行

発行元：「包括的共生概念の構築」研究プロジェクト (w-project)

代 表：野中 浩一 (現代人間学部身体環境共生学科)

連絡先：〒195-8585

東京都町田市金井町2160 和光大学

nonaka@wako.ac.jp

<http://www.wako.ac.jp/wellbeing/>

編集・レイアウト：相川 貴

「共に生きる」を考える

VOL. 2



Project Paper

ユー アンド ユー
You & You

【巻頭言】
包括的共生について

【私のオススメ】
スクーバ・ダイビングを楽しんだ後で

【定例研究会より】
異質なものの共生
～公衆衛生学の視点から～

障害者の生き方とムーブメント教育・
療法理念の接点に思う

【何してるの?】
鶴見川水族館

【プロジェクトメンバー紹介】

【定点観測の勧め】



【巻頭言】

包括的共生について

和光大学 名誉教授 最首 悟

「包括的共生」の考えは、「共生」概念を取り戻し喚起し賦活するものであることを素描する。

「共生」はあるがままの、ある現象を指して言う。ある現象とは、ある場所に複数の生きものが居て生きている、ということで、生きもの同士の間には何らかの関係が存在することを含意する。ただし無関係も関係の一つである。複数の生きもの同士という場合、ウイルス、単細胞生物、多細胞生物、また細菌から昆虫、脊椎動物、哺乳動物、その中の飛びぬけて特異な種であるヒトという動物まで、さらにまた藻類から樹木までの植物を指す。生きものは場所に生きていて、その場所は非生物の物理的・化学的関係が張り巡らされていて、生きものは場所と関係する。この場所を時間的・空間的に広げてゆき、その最大をさしあたり歴史的宇宙とすると、共生とは「宇宙における生きものが生きものと宇宙に関係しながら生きていることをいう」ということになる。

争わず助け合って生きるという、人が抱く素朴な思いをもって、弱肉強食（これも人の思いだったのだが）の厳しい自然を見ると、意外にも特定の仲良し関係が多々見つかって、それを共生と名付けたのだが、すこし観察を続けると、一筋縄ではゆかないことがわかってきた。それで片利共生とか片害共生、寄生などと名付けをすることになったものの、共生は複雑で、ついにニュートラルな「場に共にいる」という現象までならかに接続する事態になってしまった。

別の言い方をすると、「私とあなたがここにいる」という関係を探ってゆくと、関係はどんどん増えてゆく。「ここ」を「社会」と置き換えると「社会」そのものの規定とあいまって「私とあなた」の関係は多分数え上げられず、無数の中に溶け込んでゆく。「私」も「あなた」も「関係体」であり、数え上げられない関係に結ばれている。それを短く括れば「人は社会関係の総体」である。ここで自然との関係も含めたいということになれば端的に「人は関係の総体」である。「人」と生きものを置換して「生きものは関係の総体である」とすると、これは「共生」概念そのものである。

「生物間関係の総体」の研究の必要性を言い続けてきた川那部浩哉は、生物同士の曖昧かつ多義的な関係を強調する（『曖昧の生態学』農文協、1996）。しかしそれは生物ではない遺伝子にも適用可能である。遺伝子はある長さのDNA分子という構造をもつが、その働きはあるタンパク質分子の酵素をつくりだすことにあるとすると、その製造にかかわるすべての酵素、それらの酵素に対応するDNAすべて、一群のRNA、素材、水、pH、それらを一つの場にまとめている細胞、その細胞に刺激を与え



る因子などなどの関係の総体が遺伝子の働きである。遺伝子と称するところのある長さのDNAを瓶に入れて放置すれば、紫外線などによって、塩基欠損を起こし、修復など及びもつかず崩壊してゆくだけである。

アンリ・アトランは物理原理にもとづく生物の構造の解明と生じた現象の説明を試みる生物科学と、目的・意志・未来をふくむ生物の機能（働き）の記述をはっきり分ける（『生命科学と生命』国文社、1996）。生物の働きを生命といい、生命は存在しない。存在するものを対象とする生物科学者が生命学とか生命倫理に取り組むことにアトランはいたく嫌悪する。生物科学者は生氣論を排除したはずだからである。しかし「あるがままに生きる」ことが人の一つの理想ではあるものの、人のほとんどの関心事は目的・意思・未来にある。その関心事の一つとして生物の構造の解明にもいそしむのである。したがって生命学、あるいは生命が〈もの〉概念を払拭し切れなれば、〈いのち〉学と命名しなおい、〈いのち〉学こそが人の重要な営みであることを確認しなければならない。

「包括的共生」とは〈いのち〉学の目標である。目的・意思の導入、あるいは擬人化を厳に戒めてきた生物科学、そして自然科学の範疇とどの部分が重なり合いたい社会科学において、「共生」や「関係の総体」は「生きて暮らしている」ことの中立的縮約表現になってしまった。その事態からの救い出しをはかり、「総体」という考えに含まれる曖昧さや多義性や複雑性や予想不能性・不可知性に向き合い、生きものや自然界・環境を最大限に考慮しながら、人の目的・意思・未来の合意形成を図る。そしてそのためには、実存しない〈いのち〉を作業仮説としても、あるいは「異なり」が成り立つ「ことなり」とは、つねに〈異なり〉の背後にそのつど透視されるなにごとかであって、それを〈異なり〉を本質とする言語（〈言〉）でとらえることはできない（小林敏明）という規定としても、思惟行為の中心に据えることが必要になる。「共生」に人の思いを十分にこめること、それを「包括的共生」とよぶ、ということにしたい。

【私のオススメ】

スクーバ・ダイビングを楽しんだ後で

スクーバ (SCUBA) とは、Self Contained Underwater Breathing Apparatus の頭文字を集めた言葉であり、ダイビング (Diving) は潜水を意味します。このように、空気ボンベ等の呼吸器具を使って水中で潜水をする活動をスクーバ・ダイビングといいます。ときどき空気ボンベのことを酸素ボンベという人がいますが、一般のレクリエーション・ダイビング (Recreational Diving) 中に使用するのは空気ボンベであり、空気ボンベと酸素ボンベは異なります。

空気ボンベを使用すると、水の中で長い時間活動することができると、いろいろな生物やユニークな地形を観察することが可能になります。



しかし、深度が増すにつれて水圧は高くなり、海水面で1気圧の水圧は、水深10mで2気圧、水深20mで3気圧と変化し、深く潜れば潜るほどダイバーは圧縮された空気を吸うことになります。一般に空気中に占める酸素の割合は21%にすぎず、残りのほとんどは窒素で構成されていますが、私たちの体内は窒素を必要としないので、呼吸によって体内に取り込まれた空気は、二酸化炭素と窒素の形で体外に排出されます。陸上では窒素の排出に問題は生じないのですが、水中に深く潜った場合、圧縮された空気を体内に取り込む結果、体内に残留する余分な窒素を完全に排出するまで相当な時間を要します。水深10m以下の場所から急に浮上すると、窒素が気泡化する等の現象によって減圧症になる恐れがあるので、水底から浮上する際は1分間に10m〜18m以下のゆっくりした速度を保ち、十分に時間をかけて体内の窒素を排出することが重要になります。現在では危険を避けるために、水深20m近くまで潜降して30分〜40分程度活動した場合、水深3m〜5mに少なくとも3分間とどまること (安全停止) がダイバーの共通ルールになっています。

安全に水面へ浮上した後は、激しい運動をすると体内の窒素が気泡化して減圧症になる可能性が高くなるので、しばらく休息をとって体を安静に保つ必要があります。スクーバ・ダイビングの終了後、ダイバーは老若男女を問わず、その日の潜水記録をログブックに記録 (ログ付け) するのが一般的ですが、最近は撮影器材の開発が進み、素人でも手軽に水中撮影を楽しむことができるようになりました。その結果、ログ付けのときに自分が撮影した生き物を水中ツアー同行者と見せ合い、画像ファイルを交換するのを楽しむダイバーが増えていきます。これは私が沖縄で体験したことです。スクーバ・ダイビング終了後のログ付けの際、60歳を超えた男性ダイバーが、自分の撮影した海の生き物をブリクラの形状に写真印刷し、20代の女性ダイバーたちに配っている光景を目の当たりにしました。女性ダイバーたちは喜んで自分のログブックに貼付していましたが、ダイバーでなければ



このような年齢を超えた関係は成り立ちにくいだろうと感じました。

さて、ログ付けを終えて十分休息した後は、どのような過ごし方が望ましいでしょうか。

体内の窒素が抜けきらない間は、気圧の低い場所に行くと体内に支障をきたすので、高所への移動、例えば登山の計画等を翌日に組み入れないようにする必要があります。飛行機に搭乗する場合、一般に客室内は低圧に保たれていますので、搭乗するには窒素の排出が進んだ後でなければなりません。このような理由により、スクーバ・ダイビングの代表的なマニュアルの中では、反復的なダイビングや複数日にわたるダイビングを行った後、18時間あるいはそれ以上待ってから飛行機に搭乗すべき旨が記されています。仮に帰路の飛行機が早朝の便であるならば、搭乗前日の午後はスクーバ・ダイビングをしない方が望ましいといえます。

スクーバ・ダイビングの終了後、冷えた体を温めながら潮を落とすために温泉を楽しむ方がおられますが、熱い湯につかると体内で窒素が膨張して血液の流れを阻害し、減圧症になる可能性が高くなります。冷えた体を温めることは大切ですが、スクーバ・ダイビングの終了後は、ぬるめの湯につかるのが無難と思われるでしょう。



次にスクーバ・ダイビングを終えた翌日の過ごし方ですが、夜に飛行機の搭乗予定がある場合、終日ショッピングで過ごすのは物足りないもので、馬でのトレッキングやカヤックでの水上散策などを加

えることがよくあります。これらのアクティビティは、ガイドさんの同行によってエコツアーの形になるのが一般的ですが、最近では一人でも参加できるツアーが少なくなく、見知らぬ旅行者同士がツアーの場で仲間になって楽しむパターンも増えています。また、小型船舶操縦免許を持っていれば、船や水上オートバイをレンタルして、ダイビング・ポイントの周辺海域をクルージングすることも考えられますが、私の経験からすると、初めて航行する海域ではどこに暗礁があるか分からないので、詳しい方に同乗してもらうのが理想的と思います。日本の場合、水上オートバイは航行できる海域が限られるので、旅行前によく調べておく必要があるでしょう。

なお、個人的には、登山用具とダイビング器材をあわせると荷物が相当多くなるので、登山とスクーバ・ダイビングはできるだけ同じ旅行日程に組み入れないようにしています。とはいえ、屋久



島などの場合、登山とスクーバ・ダイビングの両方が楽しめますので、どうしても両方のアクティビティを旅行日程に組み入れたい場合があります。そのような場合は、登山の日程がスクーバ・ダイビングの後にならないように配慮することで、問題を解決することができます。

(小林正典)

異質なもののとの共生 ～ 公衆衛生学の視点から ～

野中 浩一



私は身体のはたらきや、保健にかかわる講義を担当しており、本学への赴任前の医学部勤めで学んだ公衆衛生学 public health もそのひとつです。公衆衛生学は日本では医学教育の一科目ですが、アメリカなどでは、臨床医学とは独立した予防医学のひとつとして、独立した教育組織になっています。個人が癌に罹患するリスク要因を避けるための personal health の積み重ねがすなわち public health になるといった話であれば、個人も公衆(集団)もあり区別する必要はないのですが、講義ではそう単純でない事例を2つとりあげて話をしています。

ひとつは、長く人類の敵とされてきた、病原微生物に対する取り組みです。こうした病原体は肉眼では見えません。抗生物質や抗ウイルス剤にしても、ワクチンにしても、それが病原体と闘っている場面を私たちは直接「見る」ことはできません。見えるのは病に苦しんだり、病が癒えたりする人間の姿だけです。そして見えない世界で起こっているはずの「理屈」だけで、私たちはときに病人の自由を制限して隔離したりして闘ってきました。患者個人にとっては health を制限することが、流行を阻止し、ほかの人間たちの health を高める、というわけです。治療薬やワクチンの量が、国民全体にいきわたるだけない場合、使えるのは誰か。早いもの勝ちなのか、優先順位をつけるのか、つけたらそれは誰なのか。これもまた健康の不平等を意味します。いのちの重みに差をつけるという意味で、これは皆が wellbeing になればいいという牧歌的共生理想に、現実的な課題を投げかけます。

もうひとつ取り上げているのが、高齢社会になった日本がこれからずっと抱えつづけるであろう高齢者との共生の話です。これは、対象が人間であり、目に見えるものです。高齢者がいずれ病んで死ぬことは避けられず、看護、介護などの対応が必要になります。65 歳以上の高齢者割合は、遠

からず 30% に近づいていくでしょう。そのとき、私たちはどう対応するのでしょうか。学生には 100 のマスのうち 30 個(高齢者)を塗りつぶしてもらいました。連続した 30 個を塗ったもの(図 A)、ばらばらに塗ったもの(図 B)、いずれも 30% ですが、印象は大いに異なります。A は高齢者を専用の施設にまとめた様子、B はそれぞれの家庭にとどまっている様子、という風にも見えます。高齢者もまた異質な存在です。それを A のようにまとめることは、効率的で合理的な考えかもしれませんが、しかし、これは隔離、分離の発想であり、多くの人から「見えなく」するやり方です。いくら異質といっても、人とウイルスの共生とは異なり、これは人と人の共生の問題であって、人は他人にその心の存在を意識します。とくに日常的に見えていれば、その意識は必ず生じるでしょう。でも、効率だけを追求することで、見えない非日常に追いやれば、それはもはや病原微生物と同じ、つい論理的な共生や、排除の思想に偏ってしまうかもしれません。さりとて、B のようにすべてを日常のままに残すことも、個別の wellbeing を低下させる可能性も高いでしょう。

宮崎駿の「崖の上のポニョ」には、高齢者施設と子どもたちの育児施設が同じ敷地に併設されている様子が描かれています。若者が高齢者の身近にあること、高齢者が子どもたちとともにあること、人と人の共生であれば、互いに見えていることが出発点のように思えます。

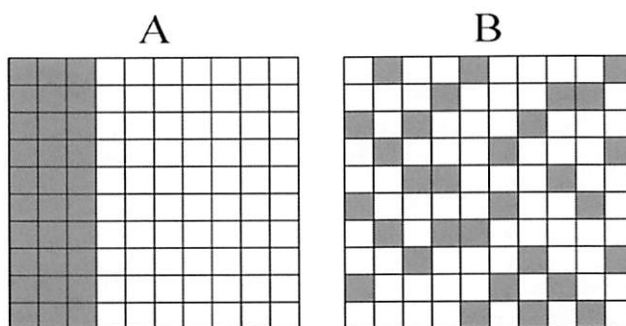


図 非日常の 30% (A) と日常にある 30% (B)

障害者の生き方とムーブメント教育・療法理念の接点に思う

小林 芳文



今年は、障害をお持ちの方々の元気な話題が、実に豊富で、それも心温まることが多いです。辻井伸行君（20歳）は、米国でのバン・クライバーン国際ピアノコンクールで、優勝という快挙を成し遂げました。2009年6月8日の新聞は、全盲ピアニストが制覇した感動とその栄誉を称える記事でいっぱいでした。視覚が不自由というハンディを乗り越え、「天から降る美しい音色」と評されるような、彼独特の音楽の世界にみんなを引き込むピアノ演奏であるそうです。目が見えないことで、彼は人の何十倍もの時間をかけて練習に練習を重ねて、自分の世界を作るのだといいます。一日8時間の練習は普通であり、ピアノが好きで好きでたまらないと感想を述べているテレビのインタビューを聴いて、私は、なるほどとうなずくことが出来ました。2歳の時から遊び感覚でおもちゃのピアノを弾き、多くの曲は、使える耳で聴いて全て覚えたといいます。楽しさと笑顔を大切にしているムーブメント教育・療法も、「からだの全てで楽しく学ぶ」ことに特徴があります。ストレンクス（得意なこと）を、使った活動は、きつい受け身の訓練より強いのです。

ご存じのように、ルイ・ブライユは、点字の考案者として知られています。今年が生誕200年に当たることから、

彼の記事も多いのです。「文字は線で表すもの」という常識を乗り越えて、「点で表す、表現する」という功績は、コミュニケーションの新しい流れを作りました。「さわる文化への招待」という本を書いた全盲の広瀬浩二郎氏は、「自分は、目が見えないことで、さわる文化、「手学問」に出会ったといいます。私の関わっている障害児ムーブメント教室でも、子どもが触りたくするような多様な遊具を提供し、活動をドンドンしてもらっています。「アクティブ・タッチ」ということばを私はよく使います。受け身でなく気持ちを入れて触れたり動かしたりすると、より脳が活性化するからです。

全盲で聾者である福島智氏は、彼独自のコミュニケーション手段である「指点字」という方法を母親と共に考案しました。それは指先を点字タイプライターのキーに見立てて打つ方法です。彼はこの4月東京大学の先端科学技術研究センターの教授に昇任しました。私がかつて勤務していた東京大学教育学研究科でも、「バリアフリー教育開発研究センター」が発足しました。和光大学では大勢の障害者が学んでいます。共に生きる環境作りに、ムーブメント教育・療法の考え方を学生と共に発信し続けたいと思います。



【何してるの?】

鶴見川水族館



和光大学に入ってからすぐのA棟1階ロビーに大きな水槽が並んでいる。その水槽をいじっている怪しい影。実はこの人、身体環境共生学科3年生の斎藤くん。この水槽の中の魚を捕ってきた当人でもある。鶴見川から和光大学まで毎日通う途中に流れる鶴見川にはいろいろな魚が泳いでいるのだが、みんなそんなこと考えたこともない。和光大

学では足もとの自然に目を向けてもらおうと、福島県の水族館「アクアマリンふくしま」の協力を得て水槽を設置、鶴見川の魚を展示している。オイカワ、アブラハヤなどの川魚が舞う姿が、訪れる人の目を楽ませてくれている。写真は魚に餌をあげているところ。

(堂前 雅史)

NEW!

《鶴見川で活動している和光大生たち》

水族館の魚たちも学生たちが大学近くを流れる鶴見川から直接捕獲します（もちろん捕獲禁止の魚は戻します）。環境との共生もW学科の柱のひとつ。《足もとの自然から考えよう》が基本です。そのためにはなによりも身近な自然をからだで感じる事が大事です。多くの学生は通り過ぎるだけの鶴見川も、講義やらかわ道楽のサークル活動などで川に直接足を踏み入れる作業をしていると、昔の《自然大好き少年少女》の感性がよみがえってくる学生さんたちも多数出現。学びはそこから駆動します。



「包括的共生概念の構築」現プロジェクトメンバー紹介



上野 隆生
(近代日本研究)

一年前(左)とは天地ほど違う毎日です。私は社会科・地歴科・公民科の教科教育法を担当していることもあって、5月末から7月初めまで教育実習生の授業を見て回るのが大きな仕事の一つになっています。朝5時起きで出かけることもあります。もう一枚は、朝一番の授業を見学してから大学に戻り、これから大学の授業のため研究室を出る直前の写真です(右)。実習生には模擬授業などをしてもらった上で送り出しています。学生の皆さんも大変な思いをしながらもいい経験をしています。



澁谷 利雄
(文化人類学、南アジア現代史)

6月にスリランカ研究フォーラムを開きました。スリランカの文化・社会、日本との関係に関心をもつ研究者、市民、学生、在日スリランカ人が、情報を持ち寄り分かち合う場です。1995年からほぼ年2回のペースで開催してきました、今回のテーマは、内戦終結を受けて、「スリランカ紛争とはなにか」としました。紛争の原因や復興への課題について、活発な意見交換がありました。



矢田 秀昭
(運動生理学、バイオメカニクス)

11年前の富士登山実習と2009年ダイビング海洋実習での一コマです。1998年夏の富士登山はこれから山頂を目指し5合目を出発するところです。8合目で仮眠を取りて来光を目指します。2009年夏のダイビングはダイビングポイントを目指しボートで移動中です。水深30メートルまで潜降し出会う予定の魚はヒラメ、ドチサメ、イワシとカンパチ、その他いろいろです。この10年間で穏やかに時間を過ごす「コツ」を学んだようです。富士登山は2009年度も実施予定です。



小林 正典
(民族関係論、東アジア地域の開発と法)

7月4日に、私が所属する日本スポーツ法学会主催の「スポーツ基本法立法専門委員会」に出席しました。会議の場では、現在、立法化が進められている「スポーツ基本法」について報告と意見交換が行われました。「スポーツ基本法」は、現行の「スポーツ振興法」の改正という形ではなく、新しい法律として動き出す可能性が高いようです。ただし、与党側が推進する法案には、市民の視点からスポーツを権利として位置づける「スポーツ権」の概念はなく、逆に、オリンピックのメダル獲得のための政策を推進する観点から、いろいろな条項が盛り込まれるようです。対案が野党側からも出ているようですが、これには「スポーツ権」が明示される可能性があるそうで、衆議院選挙によって政権交代の可能性が高い現在、「スポーツ基本法」制定の行方に注目しています。



小林 芳文
(発達運動学、特別支援教育学、ムーブメント教育・療法学)

私は、1980年当初、我が国ではまだ誰も手をつけていなかった「ムーブメント教育・療法」の研究に着手しました。その先進的な研究に取り組んでいたドイツ、フランクフルト大学には何度も足を運びました。20年前に、その大学教授夫妻(E.Kiphard博士)と、自宅で撮った写真です(左上)。その後、しばらくしてニューヨーク州立大学客員教授として米国に渡りました。写真は、この領域の研究に裾を広げた仲間達です(左下)。私と今でも家族ぐるみのつきあいのあるJ.Winnick博士(左隅)と大学院生、学部長(右隅)です。

最近の写真(右)は、テナーサックスを持っている姿をご披露します。ムーブメント教育・療法には、音楽が時に必要となります。障害児の方々に、より楽しいムーブメントの環境をこの音楽で提供したいと願っています。



野中 浩一
(公衆衛生学、胎児期環境学、双生児研究)

この2つの写真、親子といっても通るかもしれませんが、50年を隔てた、同じゲノムをもつ個体です。ずいぶん変わったような、ちっとも変わらないような。原子レベルでいえばすっかり中身は入れ替わっているはずですが、自分の心のなかでは連続した存在に違いないという確信があるのは、考えてみれば不思議な話です。今日の自分が昨日の自分と常に共生してきた結果なのだと思います。



堂前 雅史
(動物行動学、科学技術社会論、環境倫理)

大学生の頃、芝居にはまって、野田秀樹が主宰していた劇団「夢の遊眠社」というところで裏方をやっていました。多くの異能が集まり、24時間学生管理の劇場での自由な活動は、本当にしんどかったですが、普通の学生生活を送ってでは決して味わえないエキサイティングな時間を過ごすことになりました。お陰で、大学を5年間やることになってしまいました。1年分学費を余分に払っても十分おつりのある時間を過ごせました。



大橋 さつき
(身体表現論、ムーブメント教育・療法)

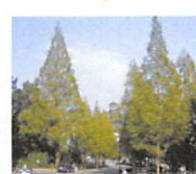
ご存知の方には息子の写真に見えるかもしれませんが、左は、1歳9カ月の私です…。3歳の息子がこれは自分だと言い張り…。確かに似ているかもしれませんが…(笑)。最近、益々わんぱくな息子に振り回される日々ですが、彼の世界が更新される瞬間に立ちあう度に、「生きる」ことについて純粋に感動します。そして、和光大生やムーブメント教室で出会う子ども達、息子の笑顔に触れ、「うれしいは正しい」を実感しています。今年の夏も学生達と熱い神戸(全国ダンスコンクール)を楽しみたいと思います！



定点観測の勧め

和光坂の名物、メタセコイアの木は四季おりおりに姿を変える。毎日目にしている、その葉がいつ芽吹き、緑を濃くし、色づき、そして冬支度を始めるか、知っているだろうか？ 三脚など使わなくても、たとえば毎週決まった曜日に定点で写真を撮りつづけてみよう。今は高性能のデジカメが手ごろな価格で買えるし、携帯のカメラだって目的によっては十分のはずだ。最も急激な変化は3月～5月、新入生を迎える季節だ。枯れ木から一気に緑が濃くなる。この写真たちは2006年撮影だから数年前になるが、メタセコイアたちの営みは変わっていない。変わったのは地面が今ではタイルで舗装されたことである。変わらないのが自然で、変わるのが人工物であることもほの見える。何気ないことでも、「つづける」ことで初めて気づくこともある。私がプロゼミを毎回このテーマにしている所以でもある。

(野中 浩一)



Project Paper

VOL. 2

2009年7月25日 発刊

発行元：「包括的共生概念の構築」研究プロジェクト (w-project)

代 表：野中 浩一 (現代人間学部身体環境共生学科)

連絡先：〒195-8585

東京都町田市金井町2160 和光大学

nonaka@wako.ac.jp

<http://www.wako.ac.jp/wellbeing/>

編集・レイアウト：相川 貴

「共に生きる」を考える

VOL. 3



Project Paper

ユー アンド ユー
You & You

【巻頭特集】フィールドワーク

①今年も踊る神戸の夏（大橋）

②三浦半島でカニの「お産」に感動（堂前）

【研究室だより】

野の学校 インドアキャンプ（矢田研究室）

【定例研究会より】

戦争と「共生」の記憶

からだと共に生きる—高齢者の生活フィットネス—

【何してるの?】

親子で遊ぼう! 和光ムーブメント公開教室

【ミニ情報】

ムーブメント新聞記事紹介

【イベント案内】

Wプロジェクトシンポジウム

「共生」は胡散くさを乗り越えられるか

【プロジェクトメンバー紹介】

【1枚の写真から】

ウミウシ



【巻頭特集】 フィールドワーク

フィールドワーク特集①

今年も踊る神戸の夏！ 和光大生がダンスコンクールに挑戦！

共通教養科目「身体表現 D・E」（担当教員：身体環境共生学科 大橋さつき）の受講生・男女 18 名が、2009 年 8 月上旬、神戸市で開催された第 22 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）の創作コンクール部門に出場しました。今年度の作品は…、



「CHRONOGRAPH（クロノグラフ） —僕が今、僕を生く—」

弱い脆い不完全 頑張る普通全力で
流されては抗って それでも今を刻み生く

* 作品解説 *

私たちは作品創作において「生きる」ということを考えた。続き続ける今の連続の中で、認識した瞬間に過去になつていく「今」を確かに自分が刻んでいくこと、それが「今」の「自分」を「生きる」という事だと捉えた。自分に対する理想やギャップ、愛しさ、誇らしさ、悔しさ、憎さ、やるせなさ、その全てを抱えながら、時には抗い、時には同化し、受け入れ拒絶しながらも自分は自分に帰るしかないということに気がつく。普通に見えても不格好だと思われても全力で生き続ける、今この瞬間を抉り、刻み続けることで、発せられるパワーを感じ、見た人が「自分を生きる」ことを意識するきっかけになりたい***

とても身近でありながら、かつ、壮大なテーマに、まさに全身全霊で取り組み、春に授業で出逢った学生たちが一つの集合体として生き、夏には、見応えのある作品を創り上げました。

コンクールの予選は通過し、入選は果たしましたが、残念ながら昨年度のように受賞はできませんでした。けれど、本選の学生たちのパフォーマンスは最高の出来栄で、私はとても感動しました。自身の全てを捧げるようにして「今」を刻み込みながら、作品と一体化し、そして、終わりのない作品に立ち向かっていく姿がとても美しく尊く感じられました。今年の学生たちも、昨年以上に、新しい風を起こしてくれたと信じています。そして、これから、また、一人一人がそれぞれの「今」を生き続けるのだと思います。応援ありがとつございました。（大橋さつき）



（写真は、決選本番直前の体育館練習の様子です）

フィールドワーク特集②

三浦半島でカニの「お産」に感動 ～文科系の大学だからできる自然環境フィールドワーク～

身体環境共生学科専門科目「フィールドワーク（地域環境）」では、多摩三浦丘陵の自然と共生する社会をテーマに、様々な調査・見学を行っています。8月には合宿形式の講義として、神奈川県三浦半島の先・小網代湾に行きました。目的はカニの「お産」の観察です。

小網代湾を囲む小網代の森は、湾に流入する川の源流から流域ごとそっくり自然が残っている、首都圏では奇跡のような場所です。その小網代の森からアカテガニというカニの雌がお腹にいっぱい卵を持って降りてきます。その夜は大潮で、潮が湾の奥まで満ちてきて、湖のように波のない海面に母カニがそろりそろりと降りてくるのです。ゆったりと上下する波間を縫って、海水に入った母カニが体を小刻みに震動させると、卵がはじけて、広がる波紋に乗ってゾエア幼生が粉を散らしたように泳ぎ出します。産み終わった母カニは逃げるように、陸地へと急ぎます。森のカニであるアカテガニは、カニのくせに海に弱くて、ぐずぐずしていると波にさらわれて溺れてしまします。母カニたちは命がけで子供を産みに来ているのです。

神秘的なその姿は多くの人の感動を呼び、テレビ番組などでも紹介されました。しかし、自然のすばらしさが有名になると、困ったことも生じます。見物客が増えると、アカテガニが海に降りてくるのを妨害してしまうのです。そこで、観察する人間は海から観察するように「交通整理」して、カニが森から無事に海まで降りてこられるようにする必要があります。カニを観察する人は、事前にNPO小網代野外活動調整会議のボランティアスタッフから説明を受けて、日没前に長靴を履いて海に出て、陸をにらみながら、



← 観察者は海に出て
カニが出てくるのを待つ

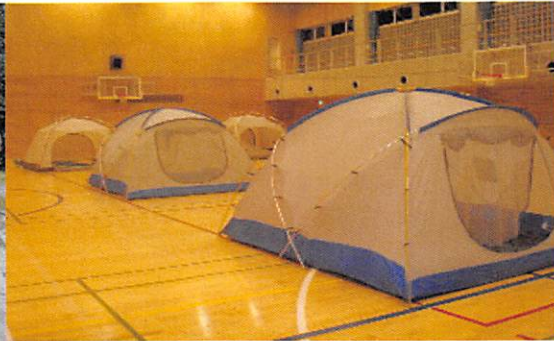


海水中で放仔する
アカテガニ →

日没と共にカニが降りてくるのを待たなくてはなりません。

観光客が気楽に来られる首都圏に残された自然を守るには、見物客対策のような社会的側面についても考えなくてはなりません。和光大学のように文科系の大学で自然保護をテーマにした授業をやっていると思うと不思議に思われる方がいますが、このように首都圏の自然保護には生態学への理解と社会的文化的な思考力・実行力が必要とされるからこそ、和光大学の得意とする分野なのです。

9月には120年の歴史を持つ東京大学臨海実験所をお借りしての合宿で、磯の生態系と社会の関係や科学史について学びます。学生たちは待ちきれないでいます。（堂前 雅史）



「研究室だより」 “野の学校” 小学校低学年 インドアキャンプ 矢田研究室

2009年7月25～26日に岩戸児童センターの子どもたち1年生～3年生の30名が、和光大学でインドアキャンプを行いました。「野の学校」のメンバーは、学生スタッフとして活動のお手伝いをしました。前日までの天気予報では当日雨が降るといわれていましたが、晴れ女が晴れ男がいたようで、2日間共とても良い天気でした。

今回の小学校低学年インドアキャンプに参加した子どもたちの目的は、日ごろの活動や行事への参加を通して、多くの人と出会い経験を重ねること、社会力を培うことです。一方で、私たちの目的は、子どもたちと触れ合うことによって、子どもたちへの指導力を高めると共に、児童館の職員の人たちと子どもを指導することによって、職場体験することです。

インドアキャンプの第一日目は、9時に集合し倉庫から必要な物品を子どもたちがスムーズに運び出せるように準備をすることから始まりました。12時に子どもたちを迎え入れ開会式を行ない、最初のイベントは体育館にテントを張ることでした。子どもたちは汗をかきながら炎天下の中、倉庫から体育館へと長い列を作り、寝袋とロールマットをわいわい楽しみながら運びました。テント設営後のイベントは、すいか割りや発見ビンゴ、カレーライスの夕食、夜の文字探しと花火を行ないました。各イベントに取り組む子どもたちの様子は汗をかきながらも生き生きとしていました。特に驚いたことは、子どもたちのカレーライスを何度もおかわりする食欲旺盛な姿で、「あの小さな体のドコに入っちゃうんだろう」と感心しました。また、かぶとむしを見つけたときの子どもたちの輝くような笑顔は忘れられません。

私たちの仕事の山場は夜にもありました。子どもたちのテントの横にロールマットを敷き、半分熟睡しながらも子どもたちを見守ってあげる仕事でした。暑く長い忘れられない夜でした。子どもたちの寝返りの多さに驚きました。昼間はあんなにやんちゃだった子どもたちも、寝顔はとてもかわいかったです。

子どもたちが寝静まった後に、今回のキャンプで子どもを預かる責任を痛感する場面がありました。それは、児童館の方たちとのミーティングでした。第一目を振り返ることによって、明日への十分な体制を整える話し合いでした。

二日目は6時に起床し、おにぎりとお味噌汁の朝ごはんを食べ、プールに入りました。真夏の暑さの中、子どもたちは気持ちよさそうにプールの中ではしゃいでいました。プールでは子どもたちと一緒に水の中で潜ったり、泳いだり楽しい時間を過ごしていました。プールの後は、ボルダリングやフリスビーなど、それぞれ自由に時間を過ごしていました。昼食は外で流しそうめんを流しました。子どもたちが流れてくるそうめんを囲んで、必死にそうめんを取りとめようとし、取り上げたそうめんを楽しそうにおなか一杯食べていました。その後、テントと荷物の撤収を子どもたちと行ないました。

最後に嬉しいことがありました。子どもたちから今回のキャンプの感想を書いたお手紙をもらったことです。子どもたちが一生懸命書いてくれている姿を見て、何を書いてくれているのかな…とドキドキしましたが、2日間の私たちの取り組み姿勢が子どもたちの書く文章に表れていると思いました。

子どもたちの帰る後ろ姿は、この2日間で成長し、小さいながらも力強く和光坂を下っていました。嬉しい一瞬でした。



← スイカ割り !!

友たちからの声援を受け大きく構え力いっぱい振り落とした棒はスイカに見事的中しました。しかし、子どもたちの力ではスイカは割れませんでした。

テント設営 !! →

みんなの協力でしっかりと組み立てることが出来ました。大きいな～。
広いな～。



← ボルダリングに挑戦 !!

順番を守って登っています。もう駄目かな !! 足がこっちで、手がそっち。みんなで教えあいながら挑戦しています。



子供たちの感想

- ・寝るときにあおいでくれてありがとう
- ・ビンゴが面白かったよ
- ・二日間だけだったけど、たのしかったです
- ・やさしくしてくれてありがとう
- ・文字さがし手伝ってくれてありがとう
- ・たのしくあそびました

報告書作成

浅海 樂、篠田 春佳、芝本 勝男、田中 志緒莉、
松崎 知花、山崎 豊、植田 明季、山下 修平

戦争と「共生」の記憶

上野 隆生

「共生」という言葉自体に違和感を抱いている、という率直な指摘をしてから、報告に入りました。これから詳細な検討を加えようと考えていますが、たとえば沖縄戦では軍官民「共生共死」ということがいわれました。また、アジア・太平洋戦争の最中には、「共生同死」とか「同生共死」などの表現が新聞記事などにも登場しています。単純に、みんな仲良くしましようという意味合いで、安直に使われているのだろうか、という疑念が付きまとう言葉です。

報告は、そのような意識を踏まえて、オムニバス形式の「身体環境共生論」で私がどのような授業をしているかを紹介しました。「平和と戦争」というタイトルを掲げているのですが、1年次の導入的意味合いの強い授業でもあり、風景を通して戦争の記憶を考えてもらいたいと考えている、と授業の意図を披瀝してから、授業で使ったパワーポイントを具体的に提示、紹介しました。

2回分が私の担当ですが、ドイツとイタリアの事例をそれぞれ扱います。

1回目のドイツに関する授業は、戦争をどのように「記憶」しているか、特に日常生活で目に触れるところで、いかに「記憶」し、その「記憶」を次の世代に伝えていこうとしているのかという点から、いくつかの具体的風景を紹介し、受講者に考えてもらうというものです。



ベルリン繁華街の掲示板：「私たちが決して忘れてはならない恐怖の場所」として強制収容所があった地名を列挙している。

2回目はイタリア（主にローマ）の風景を紹介し、現在も残っている大学などの建物とファシズムとの関連を受講者に考えてもらうという授業です。

一見何の変哲もない風景が、そして現時点では「平和」にしか見えない風景が、実は「戦争」やファシズムと密接に関わっていた、という点を理解してもらえれば、少なくともこの授業を行う意味はあるだろうと考えている、と述べて締めくくりました。



ローマ大学（サピエンツァ）



エウル（ローマ近郊）の「文明宮」

からだと共に生きる – 高齢者の生活フィットネス –

矢田 秀昭

今世紀の中頃、日本の65歳以上の人口は32.3%に達すると予想されています。世界最高の超高齢化社会になります。65歳以上のオールド、加えて75歳以上のオールド・オールドや85歳以上のスーパー・オールドの割合も世界で最高となります。このような超高齢社会の中で、高齢者は長生きをして自立を維持していくのみでなく、社会貢献をする主体として位置づけられてきています。高齢者の大多数は社会貢献をするのにふさわしい健康度と能力を備えています。このような、社会貢献は高齢者の余命、生活の質(quality of life: QOL)を高めるうえで大きな意義のあることにもなります。健康で活発な日常生活を遂行するためには、生活環境に適応できる身体能力が必要になります。この身体能力を総称して「生活フィットネス」と呼びます。生活フィットネスは加齢とともに低下します。その低下のパターンには個人差が大きく現れます(図1)。

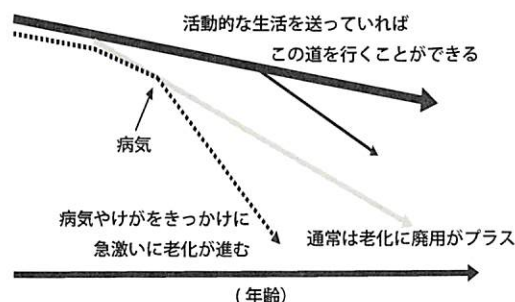


図1 生活フィットネスの年齢変化パターン(福永、2006)

ごく普通の日常生活を送っている場合に比較して、日頃活発な身体運動やスポーツを実施している場合には、「生活フィットネス」は高い水準を維持することができます。ところが、不活動的な日常となり運動不足状態が続くと「生活フィットネス」が低下し、また、病気などをきっかけにして急激な「生活フィットネス」の低下を引き起こしてしまいます。「生活フィットネス」は7つの要素に分類することができます。物を持ち上げたり、つかんだり、押したりするときに発揮する「筋力」。投げたり、打ったり、跳んだりする時に発揮する「瞬発力」。物を持ち続けたり、繰り返し持ち上げるために発揮される「筋持久力」。長い距離を走り続けるスタミナ「全身持久力」。平衡感覚に基づいた調整力「平衡性」。自分の思うようにすばやくからだを動かせる能力「敏捷性」。関節を取り巻く組織の弾力性のことで、からだを反らしたり、曲げたりできる能力「柔軟性」。そのなかでも特に重要な要素が「筋力」です。日常生活の中で「立ったり座ったりする」「歩く」「階段を昇

る降りる」このような動作は脚の筋肉の機能が維持しています。脚の筋機能の低下は日常生活動作の遂行に支障をきたし、関節への負担を増し、ちょっとしたバランスの崩れを修正できず転倒の危険性を高めます。動くという日常生活が維持できなくなる機能水準になってしまうことは、生活能力に余裕がなくなることを意味することになります。

「老化は脚から」と言います。下肢(おしり、太もも)の太さは、男性も女性も年齢が高いほど細くなることを実感します。腕や脚の太さは、それぞれの部位の筋肉量と関係があります。図2は、加齢による大腿部前部の筋肉の厚さの変化を示しています。加齢にともなう筋肉の厚さの減少が顕著に表れています。筋肉は全身で一様に減少するわけではありません。部位による違いがあります。このよう

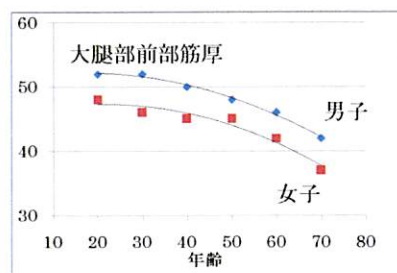


図2 筋厚の加齢変化(福永、2006)

な加齢による減少は特に太ももの前とおなかの部位に示されています。筋肉の量の低下は筋力の低下につながります。脚の筋力の低下は加齢とともにどのように変化していくのでしょうか。図3は脚の筋力の変化を示しています。20歳代の値を100%としたときの、各年代の値をみためです。70歳代では膝の伸展(太ももの前の筋肉の

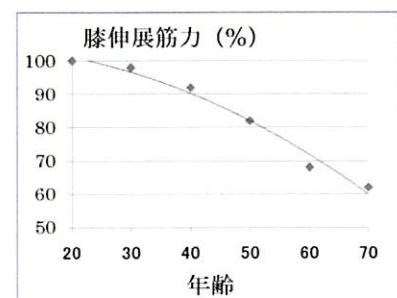


図3 筋力の加齢変化(福永、2006)

力)は約60%低下します。歩く・走るなどの移動能力は20歳代以降、年齢が高くなるほど低下します。70歳代では20歳代の50%以下まで低下します。移動能力の低下の原因は歩行・走行時のストライドの低下にあります。これは脚筋力の低下により、歩行・走行時に脚が十分に上がらないことが原因と考えられています。生活フィットネスは高齢者ほど個人差が大きくなります。日常生活の中での身体活動の程度に大きく左右されています。活動的な生活を送ることで生活フィットネスを高く保つことにつながります。

(引用・参考文献 福永 哲夫 貯筋運動 保健同人社 2006)



【何してるの?】

「親子で遊ぼう!」

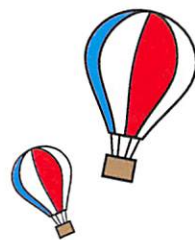
和光ムーブメント公開教室

7月19日(日)に開催された「親子で遊ぼう! 和光ムーブメント公開教室」の様子です。テーマは、「海賊になって遊ぼう!」、プログラムの立案、準備、実施に、W学科の学生たちが活躍し、親子や一般の参加者の皆さんと共に楽しい遊びの場を創りました。

子どもも大人も手拭いを頭に巻いて、海賊に変身だ! 地図を持って、4つの海賊修行に出発しました。「ジャングル探検!」、「海坊主の洞窟」、「くじらの王様を救え!」、「海賊船で大砲に挑戦!」の4つのブー

ス回りました。修行を終えて子どもたちは、海賊ハットにパイプの望遠鏡で立派な海賊になり、ダンスやパラシュートムーブメントを楽しみました。

(大橋さつき)



【ミニ情報】

ムーブメント新聞記事紹介

「教育医事新聞」(2009年5月25日号)に、私の研究領域である「ムーブメント教育・療法」の記事が紹介されました。これは、私が和光大学に赴任した直後の4月20日(月)の「日本教育新聞」での「特別支援教育に生かすムーブメント教育」の記事に続いて2度目の記事となりました。楽しい遊びの要素を持った身体運動を通じ、「こ

ころ」「あたま」「からだ」の全てを育くむ、そこには人と環境の循環があるとする学問に、教育、心理、体育、リハビリ、福祉などの領域が注目している姿と思います。私は、現在NPO法人日本ムーブメント教育・療法協会会長を務めています。そのインタビューを兼ねた記事でしたが、当時和光学園理事長の石原静子先生が、この記事を見られて右のようなメッセージを下さいました。

(小林芳文)



ムーブメント教育の我が国への紹介者、いい方において頂いてW学科だけでなく全学的に皆が元気になる良い機会を頂いたと思っています。和光の学生は、若者らしい率直さ、行動力などは、開学以来変わらないと思うので、これからもよろしく・・・。

NEW!

学外から求められる活動へ

学科の学びの柱のひとつになっているムーブメント教育・療法の学びは、単に資格がとれるということにとどまらず、学外から求められた学生たちが、さまざまに外に飛び出して活躍しています。こうして社会との接点をもつうちに、学生たちの社会性が高まると同時に、おそらく自己効力感も高くなっているでしょう。写真は、ふたごの親の会の集会に参加してムーブメントを実施する学生たち。





小林 正典
(民族関係論、東アジア地域の開発と法)

数年前の健康診断をきっかけに、メタボリックシンドロームを意識するようになりました。それ以来、時間を確保してスクーバダイビングと乗馬の訓練を続けています。いずれも一定の訓練を受けなければ始まらないスポーツですが、スクーバダイビングが器材依存度の高いスポーツであり比較的短期間で必要なスキルが身につくのにに対し、乗馬は安定した馬の乗り方を習得するまで相当長い時間がかかります。



上野 隆生
(近代日本研究)

授業は終わりましたが、期末試験やオープンキャンパス、そしていろいろな会議などで、なかなか「夏休み」になりません。昔の大学は学生も教員ももっと余裕があってゆったりしていたなあ、という思いを年々強くしています。余裕のないところに学問は生まれません。そもそも暇な人が集まってあれこれ議論したところから学校は生まれたのですから。



野中 浩一
(公衆衛生学、胎児期環境学、双生児研究)

私の人生を支えてくれたのはバドミントンという運動で、アキレス腱断裂やら、ぎっくり腰やら、数え切れないほどの傷を負いながらも、人生のさまざまな場面で支えてくれた相棒です。自分の子どもより若い学生たちと接していても、運動となるとちょっと歳を忘れて熱くなることもしばしば。Tシャツの胸の2つのソラマメたちは、研究でかかわっている首都圏ふたごプロジェクト (ToCoP) のロゴマークです。



矢田 秀昭
(運動生理学、バイオメカニクス)

さあ！ 夏です。海や山へと忙しいシーズンの始まりですが、昨年度よりトライアスロンへの仮復帰を果たしました。実に5年ぶりの参戦です。スイムで溺れそうになり、バイクは踏み込めず、ランではトボトボ走り。でも充実感は120%でした(写真)。今年の夏は、スイムはスイッチと伸び、バイクは風を切り、ランではピッチよくストライドが伸び、声援に気持ちを沸き立たせ熱くゴールテープ切りたいです。…が現実はずっと厳しいかな。チャレンジャーは一声掛けて下さい。



澁谷 利雄
(文化人類学、南アジア現代史)

この写真は 07 年 9 月に、フィールドワークの授業でネパールのカトマンドゥーに滞在した折に友人の仏教僧侶、ソービタ師に 10 年ぶりに再会したときのものです。彼とはスリランカで出会い、ネパール語を教えてもらったことがあります。お互いスリランカに留学していたので、私達の会話にはスリランカの言語シンハラ語を用います。今年度はネパールでのフィールドワークを、8 月 30 日から約 2 週間の日程で実施します。ソービタ師は住職として多忙な毎日を送っています。9 月に会えたなら、ネパールでの革命(民主化)の進展や、ネパールから見える日本の姿などについて語り合いたいと思っています。



堂前 雅史
(動物行動学、科学技術社会論、環境倫理)

「流域主義による地域貢献と環境教育(2008 年度教育 GP)」という教育プロジェクトを担当しているのですが、本プログラムは野外活動が多く、山に海にひんぱんに出かける毎日、もともと引きこもり好きだった私が、今年はすっかり日焼けしてしまいました。疲労気味ですが、学生が自然の中でいろいろ発見しているのを見ると勇気づけられます。



大橋 さつき (身体表現論、ムーブメント教育・療法)

7 月のムーブメントの公開教室では、大人も子どもも「海賊」になりきって遊び、様々な個性が共に存在し合うための場を皆で創る面白さを実感しました。また、8 月初旬のダンスコンクールに挑戦する学生達が「CHRONOGRAPH(クロノグラフ) 一僕が今、僕を生く」という作品を創り上げました。不器用で弱い自分達を必死で受けとめながら、一瞬一瞬を刻み込むようにして、彼ら自身が作品そのものになりました。踊りって面白いな～と思いました。今年の夏も学生達と一緒に「本当に楽しいことは楽(ラク)ではない」を楽しんでいます！



小林 芳文
(発達運動学、特別支援教育学、ムーブメント教育・療法学)

夏のスタートは、いつも水泳ムーブメントの楽しい活動で始まる。今年で 12 年目となる 7 月 27 日は、親子で 32 組の参加、プールでのムーブメント教育・療法の楽しさを支援でき、幸せを感じた一日でした。肢体不自由、自閉症、ダウン症、発達障害など障害のタイプに関係なく、プールでさまざまな活動を共有できること、その方法を、是非和光大学の多くの学生にも学ぶ機会をつくりたいと思います。夏は休み無く、ムーブメント教育・療法のセミナーを連続して手伝っています。「健康と幸福の達成」を大切にする活動の方法を、特別支援教育にドンドン発信したいと考えています。

【1枚の写真から】

「ウミウシ」

この写真の生物は、近年「海の宝石」と呼ばれて注目されているウミウシです。撮影日時は2009年1月27日13時21分、場所は三浦半島城ヶ島前へイブ根の水深20m付近です。右上の白地に黒い斑点がシロウミウシ、左下の青くて小さいのがアオウミウシで、いずれも関東沿岸の海底でよく目にしますが、両方が向き合っている姿は珍しいので、思わず接近して撮影しました。

各地の比較的浅い海に棲息し、牛の角のような一對の触角があることからウミウシと呼ばれていますが、「海牛」(かいぎゅう)と漢字で書けばジュゴンやマナティなど哺乳類を意味するので、通常はカタカナで表記されます。一般の人でも手軽に水中撮影ができる今日、色鮮やかで形がユニ



ークなウミウシは、移動速度が非常に遅いことから、多くのダイバーの水中撮影の恰好の材料になりました。ウミウシの体は柔らかく、殻が退化している点でナメクジに似ていますが、ナメクジの好感度が低いとは対照的です。

ウミウシは、一般に貝殻を消失した巻貝の仲間として説明され、後鰓(こうさい)類に分類されますが、学術的に未知の部分が多く、分類群には異論もあるようです。雌雄同体で岩礁や海藻の間に棲み、リボン状の卵塊を産むことで知られています、

エサの調達と生育環境の維持が難しいことから飼育には適しません。それゆえ、ペットショップで見かけることが少ないようです。「海の宝石」と称されるウミウシには、ときどき新種を見かけることもあり、レアモノをカメラに収めようと厳寒の冬にドライスーツを着て潜るマニア(筆者もその一人ですが...)も少なくありません。素潜りでは長時間水中にとどまることができないので、ウミウシの観察や写真撮影はスクーバ・ダイビング愛好者の特権となっています。

(小林正典)



Project Paper

VOL. 3

2009年8月21日 発行

発行元:「包括的共生概念の構築」研究プロジェクト (w-project)

代表:野中 浩一 (現代人間学部身体環境共生学科)

連絡先:〒195-8585

東京都町田市金井町2160 和光大学

nonaka@wako.ac.jp

<http://www.wako.ac.jp/wellbeing/>

編集・レイアウト:相川 貴

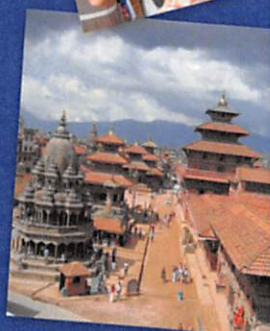
「共に生きる」を考える

VOL. 4



Project Paper

ユー アンド ユー
You & You



【巻頭言】

「共生」への旅の途中

【定例研究会より】

共生・共創をめざした遊びの場づくり

～和光ムーブメント教室の可能性～（大橋）

海は誰のもの（小林正典）

他者と生きる

～スリランカ仏教社会から考える～（澁谷）

【何してるの？】

「ネパール写真展」

【プロジェクトメンバー紹介】

【1枚の写真から】

「私は誰でしょう？」



1. 2009 年の歩み

2009 年は、開設 3 年目を迎えた私たち W 学科の目標を見つめ直した年でした。1 号の冒頭に書いた文章では、学科の共通項であるべき「共生」が、いざ実践となるとそれほど容易なものでないことを出発点に据えたつもりです。「共生」という言葉は、耳障りはいいですが、今や多くの大学が理念の一部として掲げていますが、医者の不養生ならぬ、共生学徒の不共生となつては、いささかみっともない話です。

2009 年度教育重点充実事業「包括的共生概念の構築」の始動にあたって、まずは学科専任教員がそれぞれの領域でかかわっている「共生」について、研究会で報告して共有、議論を計りました。報告の要点はこの W 新聞の記事としても短く記録してあります。11 月初頭には、大学祭のさなかに、名誉教授の最首悟さんをお迎えして、『共生は胡散くさを乗り越えられるか』というタイトルで公開シンポジウムを開催しました。また、7 月から 4 回にわたって開催された地域連携講座『遊びの場づくりに役立つ「ムーブメント教育・療法」の理論と実践』は、このプロジェクトも共催しました。わずかではあっても、この学科を元気にしようという一念で前を向いてきたつもりです。

2. 日本共生学会の旗揚げと先達からの示唆

2009 年 6 月、「共生学」の先達である星槎大学が中心となって、日本共生学会が旗揚げされました。私の脳裏には synchronicity やら serendipity やらの単語が浮かびつつも、これ幸いと、学科の場で、「共生科学」は科学たりうるのか、という生意気な問いかけをさせていただきました。

理事のお一人の碓氷尊さんには私たちのシンポジウムにも参加していただき、その折に、私の青臭い問いかけに静かな回答を示すかのような『「日本共生学会」へのいざない』というご自身の貴重な文書まで頂戴しました。そこには、歴史の重みもあるヒントが多く記されているので、ごく一部ですが、私なりに読み取ったことを記しておきます。

碓氷氏の文書には、「共生科学」とは何で、何を指すものかが書かれています。こんな一節があります。――「共生を科学する」ことの狙いは、「顔の見える人と人との複数のネットワークを拡げて、解決すべき問題に応じて「公共圏」と生活世界（＝「親密圏」）との境界を行き来する（中略）気力と知力を具えることにある――。さらに、親密圏とは、「顔の見える」人と人の「あいだ」の関係とその連鎖からなる世界だが、主体的にかかわることが容易でない巨視的問題群をかかえる「公共圏」と別々のものではない、と指摘されます。そして、「共生は不可避」だが「共生は不可能」という多元的社

会にあって、「討議倫理学」の考え方に光をあてています。自然科学を頂点とする知の階層性を否定しつつ、共生科学は唯一の総合的・学際的システム（すなわち the kyosei science）ではなく、各専門科学領域にある a kyosei science が集まった、無数の kyosei sciences の集合なのだと示唆されます。共生をさまざまな個別科学が捉えながら、互いに切磋琢磨して実践に結びついた研究活動を進めればよい、ということです。たしかに、共生科学という単一の discipline を考えるのでは目的地から遠ざかってしまいそうです。

3. 「共生」の実践を支える教員の役割とは

手前味噌になりますが、W 学科には、他の大学とはひと味違った「共生」を学生たちとともに実践している教員が多いと考えています。教員はそれぞれの分野で一家をなすだけの専門的土台があるのですが、いざ実践となると、それぞれの専門知識を「伝授」するだけでは生き生きとしたものにならず、学生たちの感性が動き出すような場をつくるのがなにより重要なことなのでしょう。今年の年賀の挨拶で、畏友の安藤寿康さんは「いま私たちは BC から AD へ」という言葉を書いています。Beyond Crisis（危機を超えて）Altruism Dominant（愛他主義優勢）へ、というわけですね。教員が育むべき感性はそこにあるようにも感じています。

研究会やシンポジウムなどを通じて、「自発的ないのちの発露」「ゆれ、ゆらぎ」など、モード 2 の学問としての「いのち共生学」のしっぽにだけは、少しでも手がかった気もしているのですが、まだまだ、机上の空論に近いかもしれません。これまでの議論は、本年度の学科紀要にまとめ学生用の教科書の製作も計画していますので、詳細はそちらに譲ることにします。

4. これからの旅程

このプロジェクトはまだまだ始まったばかりですし、ともかくも始められたことを是と考えていますが、結論の見えている出来レースではありませんから、ゴールを模索する遭難覚悟の旅はこれからも続きます。2010 年度の新入生を迎えると W 学科も 4 学年が揃い、ようやく本格的に飛翔からダイブへ向かう「U & U」のスタートです。



共生・共創をめざした遊びの場づくり ～ 和光ムーブメント教室の可能性 ～



大橋 さつき

和光大学では、2004 年度から親子ムーブメント教室を開催し、「ムーブメント教育・療法」の理論に基づいた家族支援、地域支援の活動として大学周辺地域の親子を中心に、障害のある子どももいない子どもも一緒に参加しています。学生達の積極的な参加で創造的な活動へと発展し、遊びのプログラムに季節感やテーマ性をもたせたり、その世界観を演出するオリジナルの遊具を作成したりして、一貫したドラマ性のある環境づくりを目標としてきました。

ムーブメント教育・療法では、環境の誘引力を最大に活用し循環型のシステムを生むことを大切にします。

例えば、目の前に風船が出てくれば、つつい手を伸ばしてしまうように、私達は、自分を取り巻く環境から様々な情報を獲得し、同時に環境に対して積極的に自らを発信して関わっていて、身体を取り巻く様々な「もの」は、人も含めて、全てが動きを引き出す「環境」であると考え、それらとの関係性をアレンジすることで、参加者の自発性・自主性を重視して活動を発展させることができるのです。

和光ムーブメント教室の活動の中では、このような考え方を確認してきましたが、本年度は、さらに、子どもも大人も皆、参加者同士が共に育み合い、共に場を創る喜びを感じながら、「共に存在し合うこと」を大事にできる活動を目指して取り組んでいます。

最後に、共生・共創をめざした和光ムーブメント教室の特徴として、以下の3点を紹介します。

(1) ファンタジーの魅力と日常とのつながり

教室のプログラムにドラマ性を取り入れ、テーマにそって環境全体を演出することによって、ファンタジー溢れる遊びの場が生まれました。さらに、ドラマ性を重視する以前から重視してきた「家族支援」の考え方に基いて、家庭での生活にも反映できるように工夫されていたので、ファンタジーの世界を大いに演出しながらも、日常生活と結びつきがあり、決して、現実逃避の活動ではないことが重要な特徴となりました。その結果、参加者がファンタジーの世界と現実の世界を自由に行き来しながら、自己を知り、他者を知り、人間関係を育み合い、現実を生きる力を一層豊かにしていくプログラムとなりました。

(2) 「本気で遊ぶ大人」という環境

ドラマ性やファンタジーを重視したムーブメントプログラムにおいては、大人も子どもも、協力して創造する経験、五感や想像力を働かせる体験、役柄を演じることで「異なる生」を生き自己理解を深める経験を通して、自己を表現します。そこでは、参加者の存在そのものが「環境」の一部であり、互いに影響し合っていることに気づきます。学生達は、実践を通して、新しい自分を試し、違った視点から物事を体験する機会を得て楽しんでいたのかもしれませんが、保護者には、学生達の存在そのものが魅力的な環境として受け止められています。子ども達にとって、学生達が、「世話をしてくれる大人」ではなく、本気で遊びに興じる存在として共に場を創っていることが大事な環境だったのでしょうか。

(3) 余白を想像する楽しみ

ドラマ性を大事にし、ファンタジーの世界を演出するために、学生達は遊具の活用を工夫したり、活動空間を装飾したりしましたが、それらが、とても素朴でシンプルなものであったことが、より子ども達の想像力を刺激して、創造的な展開を生んだのではないかと考えられます。子ども達と学生達のやりとりを見ていると、余白にあるものを互いに想像して伝え合い、共有することで、共に場を創り上げているように思えます。演出効果をねらって立派な造形物や複雑な装置を準備しても、それらが子ども達の創造性を受け入れる余地のない画一的な活動のためのものならば効果的とは言えず、素朴なものでも変容性や応用性のあるものの方がより充実した展開を生みます。



海は誰のもの

小林 正典

海の所有者が誰かについては、1986年の田原湾干潟訴訟で、最高裁は「海は土地ではなく、所有権の対象にはならない」、「海は、古来より自然の状態のままて一般公衆の共同使用に供されてきたところのいわゆる公共用物であって、国の直接の公法的支配管理に服し、特定人による排他的支配の許されないもの」と判示しました。

一方、天然の海の生物については、民法第239条が「所有者のない動産は、所有の意思をもって占有することによって、その所有権を取得する」と定めており、最初に生物を採捕した者に所有権が帰属することになります。

寛保元年の『律令要略』の「山野河川入会」の中で、「磯嶺は地附次第なり、沖は入会」と記されているように、「磯」の沖合部分は隣接漁村民の自由な入会漁場ですが、沿岸部分は地元の漁民に独占的利用を認めてきました。明治以降、漁業に関しては西欧に模範とする法制度が見当たらず、当時の水産局が全国の漁業慣行を調査・整理して旧漁業法（1901年）が制定され、漁業権が定められました。しかしながら、漁業権だけでは海の利用の秩序が保たれないので、その村に住む村民各自が、その漁村が定めた掟に従って地先水面の利用を管理・調整し、採貝採藻を行う「一村専用漁場」という慣習上の概念が容認されてきました。これは、民法第263条の共有の性質を有する入会権であり、「地先権」とも称されますが、これに依拠して各地の漁業協同組合がマリンレジャーを管理・運営しています。

ところで、漁業と競合するマリンレジャーの例として、スクーバダイビングを挙げることができます。

現在のスクーバダイビングは、一般に生物の採捕を

目的としないのですが、漁協が密漁者の排除に目を光らせており、どここの海でも自由に潜れるわけではありません。ちなみに、1993年に提訴された大瀬崎ダイビングスポット裁判では、最終的に漁協に支払う潜水利用料は漁業権侵害の対価としての性格を持つ合法なものとして判示されましたが、1997年の宮古島ダイビングスポット裁判では、漁協がダイビング事業者らに対してダイビングスポット使用の全面禁止を求めたものの、2002年に最高裁は漁協側の控訴を棄却しています。このように、ダイビングスポット利用に関する権利の内容と所在は、個別の事案によって異なります。

最近制定されたエコツーリズム推進法では、市町村長が特定自然観光資源の所在する区域への立入りを制限する条項（同法10条）が盛り込まれましたが、これに依拠して、慶良間諸島では、渡嘉敷、座間味の両村と事業者でつくるエコツーリズム推進協議会が、ダイバーの立ち入りを制限する条例の制定を進めています。しかしながら、エコツーリズム推進法に基づくダイバー立入規制は、民法の入会権との関係が整理されておらず、研究も十分に進んでいない状況にあります。慶良間諸島の立入規制を契機として、今後、「海はだれのものか」についていろいろな論点が提起されることが予想されます。



他者と生きる ～ スリランカ仏教社会から考える ～

澁谷 利雄

1. 南アジアでは人間と動物が近い

南アジアでは、日本と比べて都市でも村でも、容易に野生動物を間近に目にすることができる。ここでは筆者が最も深くかかわってきたスリランカの仏教社会の事例を紹介したい。

スリランカは北海道ほどの広さで、人口は約2,000万である。多文化、多民族社会で、仏教徒のシンハラ人が70パーセントを占める。他は、ヒンドゥー教徒のタミル人、ムスリム、マレー人、混血のバーガーなどからなる。シンハラ人の間では、鳥やリスに食物を与える光景をよく見かける。

2. 布施のしきたり

紀元前3世紀に仏教が受容されており、在家の間でも五戒すなわち、不殺生、不窃盗、不邪淫、不妄語、不飲酒に基づいた仏教道徳が広く根付いている。

人間と動物の近さの要因は、不殺生の生活態度以上に、布施の慣習が大きいと思われる。布施とは本来、僧侶に食物を施すことである。檀家の間では当番制になっており。毎日、朝昼の2回、寺院に食事が届けられる。まずは仏陀像に供え、次に僧侶が食す。お下がりはいヌ、ネコ、リス、鳥が食す。また、カラスに対する布施も重視されている。カラスは人間の運命をつかさどる星神の使いと考えられており、星めぐりの悪い時期に当たっている者は、貪欲で浅ましいカラスに食物を与えて、星めぐりの改善を期待するのである。結果として、これにリスや他の鳥も集まることになる。

3. 輪廻の宇宙での連鎖

上座仏教の究極目標は涅槃である。神々も人間も、悪霊も動物も、あらゆるものが涅槃をめざす。しか

し、輪廻の宇宙のなかにいる人間にとってそれははるかに遠い目標である。大方の在家の者にとっての可能な選択は、せいぜい来世でのよりよい再生を願って、現世で功德を積むことである。

功德を積む行為は、仏陀像に花や線香を捧げることから、寺院への寄進や自ら出家して僧になること、他者への支援など様々ある。なかでも、布施は最も頻度の高いものといえる。人びとはまた、功德を神々に贈って願い事をかなえてもらう。

しかしながら、悪行を重ねるとこれも蓄積され、来世ではより不幸な生、時には悪霊や動物に転落するかもしれない。最悪の生は、イヌあるいはカラスに生まれ変わることである。こうして人間は、現世のみならず前世や来世までの射程のなかで、神々や悪霊、死霊、動物たちとつながっているのである。

4. 様々な他者とつながっている

輪廻の宇宙を背景とした連鎖の感覚は、人間と動物の距離の近さだけでなく、特有の社会活動を生み出している。たとえば、老人ホームや孤児院、障害者施設の運営には、布施の慣習が活用されている。また、不殺生の農法もみられる。



【何してるの?】

「ネパール写真展」



ろするイヌ、王宮広場でくつろぐ人びとなど、都市の日常生活の光景を捉えているものが主体でした。

学生たちは、日本では触れることのない多くの体験をしたことでしよう。

(澁谷利雄)

ネパールのフィールドワークに出かけた学生たちが写真展を開きました。2009年10月5日から1週間ほど、会場は図書館内に新設されたホールでした。

2週間にわたるフィールドワークから戻ったのは9月半ばですが、まだネパールの興奮冷めやらぬうちです。衣食住や信仰など生活文化の理解をテーマにして、古都パタンでのホームステイやラマ教寺院内の宿舎での滞在を経験しました。

日々の食事や露店で野菜を売る女性、神仏の祠、路上にたむ



新しい共生社会の市民になるために地球を知ろう

NEW!

W 学科では 2012 年度に 2 名の在学生がピースボートの第 77 回のクルーズに参加しました。3 か月ほどのその旅は、参加した学生たちにとって大きく目を開かされるような体験だったようです。その体験は学科の卒研発表会 (WWF) でも発表してもらいました。他の学生たちにとっては、参加した学生の話聞くだけでも、共生社会の市民になる重要な刺激になったように思います。W 学科では足もとの身近な共生を軸足に置きつつも、こうした地球規模のさまざまな《異質な存在》との共生を考える学生さんがさらに増えることを願っています。

W 学科では、NGO ピースボートとのより密接な交流を深めるために、2013 年 2 月 20 日に、互いの交流を目指す協定書に調印しました。今後、さまざまな形で、学科の学生たちに情報提供や支援を強めていきたいと考えています。2013 年度からは、ピースボートに参加すること土台にしたフィールドワーク科目 (地球を知る) も開設しています。





上野 隆生 (近代日本研究)

少し遅れ気味の近況ですが、これは昨年イタリアのボルツァーノ（ドイツ語名ではボーツェン）というところで撮った写真です。ボルツァーノは南チロルの都市で、長らくドイツ語圏でした。そのため今でもドイツ語とイタリア語の両方が使われていて、市の広報文書は必ず二か国語で記されています。地名が読み取れるでしょうか。ローマ字読みでも読めるとありますが、アウシュヴィッツなどユダ



矢田 秀昭

(運動生理学、バイオメカニクス)

クライミングと出会ってからもう7年になります。パレストラのサブアリーナにボルダリング壁、エレベータ壁にフリークライミング壁があります。壁をよじ登る時、からだのバランス感覚が大切になります。設定されている難しさの違うルート課題を、攻略する動きを考えゆっくりと自分に向き合います。改めて挑戦が始まっています。このところ・・・が加速しています。頭が筋肉がパンプパンプ！！興味ある学生はぜひ一声掛けて下さい。



小林 芳文

(発達運動学、特別支援教育学
ムーブメント教育・療法学)

本大学に赴任して、もう少して1年になります。私の出せる力を振り縛り、授業など活気を持って取り組みました。約100人の受講生の授業（障害児運動支援学）では、「ポイントと感想」を、毎回小レポートさせ授業に活かしました。「感動した」とする学生の言葉を聞いて嬉しく思いました。ある事に心動かすこと、共感・共鳴して自らの心自体が反応し影響を受けた授業づくりが出来たことに感謝します。

ヤ人の絶滅収容所の名前が書かれています。この地域のユダヤ人たちはここから絶滅収容所に送られました。廃線となった線路も一部を敢えて残しています。そこに作られたのがこのオブジェで、ホロコースト（ユダヤ人虐殺）を忘れないためのモニュメントです。ボルツァーノ市内に何か所かこのようなモニュメントが作られています。戦争や虐殺をどう記憶するかは重要です。特に、引き起こした側・虐殺した側・加害者側がどのように記憶にとどめるのかは大切です。「いのち」に関わる問題を簡単に忘却の彼方に置いてしまっはいけないでしょう。自ずと笑顔が消えているのはそんなことを考えていたからかもしれません。このような問題も授業の中で一緒に考えていきたいと思っています。



小林 正典

(民族関係論、東アジア地域の開発と法)

日頃、馬術の訓練を受けていて、馬に乗る醍醐味に魅せられています。調教が行き届いた馬であつても、ある程度乗りこなすには、乗り手が馬の動きに合わせて細かな操作をする必要があります。そのために乗り手はいろいろな騎乗の条件を揃えることが必要になりますが、初心者の間はなかなか条件が満たされないで、バランス良く馬に乗ることは容易ではありません。必要な条件が揃うまでは、指導者の厳しいチェックの下で訓練を重ねる必要がありますが、苦勞が多い分だけうまく動かせたときの感動もひとしおです。人馬一体となって経路を終えた後、どことなく馬の表情が満足気に見えるのは気のせいでしょうか？



大橋 さつき

(身体表現論、ムーブメント教育・療法)

6月初旬に二人目出産予定で妊婦生活真っ最中です。6ヶ月検診で見たお腹の中の我が子の姿です。残念ながらオマタを開かず性別は判明しませんが、「耳」がよく見えました。もう随分聞こえているそうです。2、3月は学生達が主催するムーブメント教室がいよいよ大学を飛び出します。楽しみです。たくさんの笑い声が可愛い耳にも届くと思います。その前に愚痴を言わないようにしよう…と心に誓ったのでした…(笑)。



野中 浩一

(公衆衛生学
胎児期環境学
双生児研究)

親子というのは究極の肉親であり、私のゲノムが上の2人から受け継い

だものであるのは確かですが、人生の終着駅を迎えたときには、肉親といえども、さまざまな意味で異質なものになります。こんなに近い存在なのに、もどかしくも遠く感じる存在との共生というのは、論理では簡単に割り切れません。老いを生きるといえるのは避けようもなく無残な面もあり、それを客観的に見つめるのは科学だと思っていますが、それだけで理想的な共生が生まれないことを実感しています。



渋谷 利雄

(文化人類学
南アジア現代史)

冬休み中の1月5日に、谷中の七福神巡りをしてきました。七福神巡りは初詣のひとつとして江戸時代に大衆化しました。徳川家康が健在の時代に開設されたという谷中は、関東最初のコースだそうです。まずは上野・不忍池の弁才天から歩き始め、護国院の大黒天、天王寺の毘沙門天、長安寺の寿老人、修性院の布袋尊、青雲寺の恵比寿、東覚寺の福祿寿と回って、田端駅から帰りました。このコースは3回目だったのですが、思わぬ発見もありました。通過した谷中墓地では、江戸の悪女と言われた「お伝」の墓に出会いました。夫をはじめとして数人の男を殺し、打ち首になったといひます。ところが今では、願掛けすると宝くじが当たるとかで、参拝者が耐えないのだそうです。



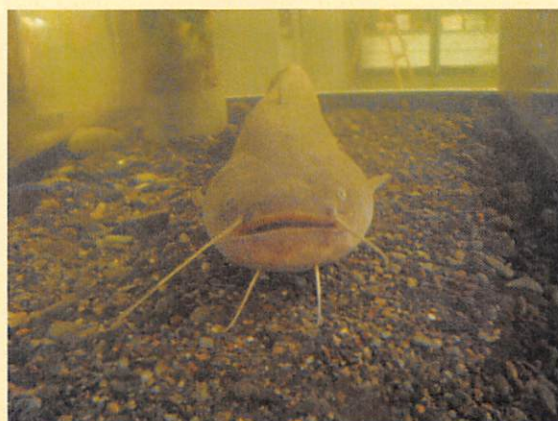
堂前 雅史

(動物行動学
科学技術社会論
環境倫理)

年末はたまっていた仕事。お正月は年末に出来なかった大掃除。で、結局休めない冬休みが終わると、お正月のどんど焼きの行事。学生と一緒に地域のお焚き上げのお祭りの準備をしました。今年は、前夜はライトアートとライトアップもあって、お正月の神様が素敵な光の芸術に。もちろん当日は迫力のある火の祭典。来年は是非皆さんも参加して下さい。

【1枚の写真から】

「私は誰でしょう？」



こんにちは！ 私は和光大学入口にあるA棟というビルのロビーにある水槽の中で来訪者を迎えている、60cm以上はあろうという大ナマズです。目立たない色をしているので、水槽の中をのぞき込まないと気づきませんが、気づいた人は私の大きさに度肝を抜かれています。

私が住んでいたのは、皆さんが鶴川駅から和光大学に行く途中で渡る鶴見川の大正橋の下の水の中。身体環境共生学科の学生さんたちが小魚を捕ろうと草むらの下にタモ網を入れたら、ずしりと手応え。そう、

うっかり私はタモ網の中に入って捕らえられてしまったのです。ちょうど、身近な自然を見直そうという和光大学の環境教育プロジェクトが世の注目を浴びたタイミングで、私はそのメッセンジャーに選ばれてしまいました。この写真もその学生さんが撮ってくれたものです。

お陰で、和光の学生たちと顔を合わせる日々を送っています。毎日、同じ顔ばかり見ても飽きるので、皆さんも会いに来て下さいね。

(堂前 雅史)

(※ その後、この大ナマズは天壽を全うし、手厚く葬られました)



Project Paper

VOL. 4

2010年3月12日 発刊

発行元：「包括的共生概念の構築」研究プロジェクト (w-project)

代 表：野中 浩一 (現代人間学部身体環境共生学科)

連絡先：〒195-8585

東京都町田市金井町2160 和光大学

nonaka@wako.ac.jp

<http://www.wako.ac.jp/wellbeing/>

編集・レイアウト：相川 貴

W 学科 学びのモデルと進路

就活の面接者やら、親戚の人やら、高校時代の仲間やらから、「《身体環境共生学》っていったい何を学んでいるの？」と尋ねられたとき、なかなか無難な答えが見つからなくて、苦勞する学生さんもあるようです。たしかに、「法律を勉強しています」「プログラミングを勉強しています」といった簡単な答えは出しにくいかもしれません。しかし、W 学科は小さな学科でありながら、視野は広く、か

つ多様であり、そもそもすべての学生さんが同じ答えにはならないはずなのです。和光大学は学部学科の垣根を超えた履修の自由度が高いことで有名で、W 学科でもそうした講義バイキングに魅力を感じて入学した学生さんたちが多数派です。以下に学びの例を紹介しますが、あくまでこれは一例。ほかのどこにもないカリキュラムはあなた自身がつくりあげてください。

《お客様に楽しんでもらいたい》

T さんは根っからの《お客さまの笑顔を見たくて》派。在学中からアルバイトはレストランの接客に工夫をこらす。色彩検定も独学で挑戦し 2 級を取得。某大手レストランチェーン経営の会社に勤務し、最初は現場で鍛えられながらも、やはり《ひとに楽しんでもらいたい》という精神は健在。



《保健体育教職を目指し障がい者ケアに気づく》

いつも明るく先頭を切って行動するタイプの H くん。入学前から地元の学校の子どもたちのお世話をしていた、子どもたちの大の人気者。教職課程の講義も精力的に取得してきたが、障がい者支援関連の講義も受け、ムーブメントの講義や活動も楽しむ。もはやただの体育教員とはいえない。卒業後は特別支援の教員の非常勤職に挑戦中。



《自然の生きものたちへの愛と被災地支援》



自然大好き少年が大人になったような S くん。毎日のように欠かせない生き物たちの世話のためなら、なには置いてみても構わない。環境系の講義はもちろん真面目に出るが、環境保全サークル活動のためのキャンパス滞在時間が長く、みんなに愛されるキャラとして活き活きと楽しそう。震災後に気仙沼・大島のボランティアに出かけ、その支援活動も楽しんでいる。博物館学芸員の資格にも挑戦中。

《東南アジアを制覇するぞ》

座学よりも討論のできるゼミのほうが好き。教室の中よりも、外に出ていくのが好きという N さん。資金のためにはバイトもがんばらないといけないけれど、在学中にどれだけフィールドワークに挑戦できるか。究極的には自分の仕事で幸せな人をふやしたい、ということが夢かな。でも、学生時代は、講義での出会いだけでなく、さまざまな《他者》と出会う機会をうかがっている。



《心のバリアをとっばらった仲間との出会い》

ダイビングなどのアウトドア関連講義が好きで、野の学校のような課外活動にも熱心な U さん。聴覚障がいの仲間と接しているうちに、いつのまにか、手話も一人前に。卒論も心のバリアフリーにかかわるテーマに。でも、謙虚で、いつも集団活動の下支えをしてくれた彼女は、就職に焦ることもなく、学生最後の春も、隣の国への旅行を満喫。しかしひよんな縁で、某有名大学の障がい学生支援センターの職との出会いがあり、小規模ながら、重要な仕事の下支えに励んでいる。



《なんといっても愛している車がある》

教職は取っていても、とりあえず卒業後は車関係の仕事に就きたいと思っていた S くん。卒論では希望している会社の車種をテーマに売り上げのための企画を考える。やるときはやる、という感じで、めでたく、愛する車を売る営業の仕事に元気づけられている。



《ダイビングと旅行が好きだから》

自分のやりたいこと、取得したい資格がすべて W 学科なら実現できるからと入学してきた K さん。遠距離通学もなんのその、電車内は読書や学習にあてて乗り切っている。夏はダイビングに打ち込みつつ、自然保護サークルの代表を務めながら、旅行業務取扱主任の資格には独学で挑戦し、在学中に見事取得。保健体育教員の資格も挑戦しつつ、将来は環境保全のことがわかる旅行関係の職も視野に。



《自分の身体に潜む表現を掘り起こしたい》

以前からダンスの訓練を受けているので、身体表現には自信がある O くん。技術的にはあたま一つ以上抜けていたけど、初心者たちと集団で身体表現とパフォーマンスの授業に取り組むうちに気づいたことがあったよう。自分の身体を鍛えるのは自分しかいないかもしれないけど、チームでの経験は今後にも生きることだろう。



《ムーブメント教育・療法に出会ってしまった》

運動神経にはちょっと自信のある N さん。保健体育教員も考えていたが、「身体表現とパフォーマンス」や「ムーブメント教育・療法」の講義に出会って、もっぱらそちらにのめりこむ。本人は頭より身体と言いながら、ムーブメントのリーダーとなると本領発揮。実施しては課題をみつめて工夫する姿は、頭も身体も、の好循環。社会からも一人前の大人として《仕事》を依頼されるようになる。資格はこれからだけど、卒業後は子どもたちを相手する保育の場に。





オリエンテーション

新入生はオリエンテーションの最後に、地元の岡上(おかがみ)を歩きます。まずは足もとの自然や地域の姿を知ることから。

源流ウォーキング

1年生は必修のプロゼミを受講しますが、毎年5月の第2日曜は合同のプロゼミとして、ふだん見ている鶴見川の源流をウォーキングします。

START!

春

卒業証書交付



ご卒業おめでとうございます

GOAL!

和光大学は入学《式》も卒業《式》もないことを謳っています。卒業証書交付をしたら、卒業全員が体育館で歓談・交流し、社会に巣立っていきます。でも、やはりこうした機会に着物を着たい学生さんは増えてきたようです。



大雪が降って、通学路が氷結して大変なことに…。ゼミの時間を利用して、アイスバーンはがしに汗を流しました。ふだんの講義ではうかがい知れない学生たちの《身体知》が発揮されてびっくり。

冬



WWF

WWFはW学科の卒研発表会を兼ねたお祭り。学生たちが中心になってスポーツイベントや交流会も企画します。みんなで楽しむためにはどうしたらいいかを考え、チームで動く体験は、案外、社会に出てから役立つ学習の機会でもあります。

保健体育模擬授業

冬場は、次年度に教育実習に行く学生たちの模擬授業の締仕上げの時期でもあります。体育の授業だけでなく、保健の授業もしっかり指導案を練り上げなくてはなりません。



岡上西町会 納涼祭

岡上の夏祭り。やぐらの設営など、地元の方の準備を若い学生の力でお手伝いします。こうして地域の方に顔を知っていただくことも共生には大事です。



Be nice & happy!

写真でたどる



どんと焼き

和光大学名誉教授の鈴木勲さんが復活のきっかけとなった地元の《どんと焼き》は、セイの神の材料集めから設定まで、古老の方たちの指導のもと、学生たちも手伝うだけでなく、韓国のお雑煮(トック)をつくらせて出店でふるまったりと、すでに地元の恒例行事の重要な一員になっています。



どんと焼きの日までの期間、夜はこうしたライトアートが設置され、小田急線の車窓からも見る事ができました。本学教員の伊藤隆治さんの作品です。

子どもたちの先生

これは、かわ道楽の学生たちが、地元の保育園の園児たちに川遊びをさせている風景。安全管理のために講習を受けたりして、万が一にも事故がないよう気を配りながら、お兄さんお姉さん役をしっかりと。園児たちの目はきらきら輝いています。



ムーブメント

燈籠ムーブメントでは、光と音がうまく工夫されていて、定番のパラシュートもひと味違いでした。

ムーブメントは企画や遊具の開発まですべて自力で。さくらんぼムーブメントの回では、こんなものをつくっていました。



夏

フィールドワーク、ゼミ合宿

三崎の臨界実習（フィールドワーク授業）のスナップ。昼間はふだん知らない種の生き物たちを嬶々として採集してスケッチ、夜には海鞘の受精卵の発生を観察。食事もしそこそこの、顕微鏡下で展開する生命の神秘に興味津々。ふだんの講義ではなかなか見かけない姿です。



多くのゼミでは夏合宿をして、卒論中間発表をしたり、ゼミ生の交流を深めたりしているようです。和光大学が提携している千葉のゼミナールハウスでは、地元の方が、流しそうめんまで準備してくださって大歓迎。



W 学科の春夏秋冬



「身体表現とパフォーマンス」

《身体表現とパフォーマンス》の授業の発表会。徹底的に自分の身体と向き合って表現を追求することには、それまでの舞踊体験は必ずしも必須ではないようで、粗削りながらもおもしろい表現が出てきます。



G棟祭

G棟祭。W学科の教員のうち4名の研究室はG棟にあります。学生たちが自発的に、G棟3階の廊下と研究室をつかった、一品供出交流食事を企画するように、いつのまにか伝統みたいになりました。



学祭

和光大学の学祭は、大学の仕切ではなく、学生たち自身が《学祭機構》を立ち上げ、大学と交渉しながら、自らの手で運営するという自治の伝統がつづいています。以前よりはお行儀がよくなったようですが、それでも、学生たちのふだんとは違う顔が見られます。



秋

学外見学

衛生学の講義で、浄水場や下水処理場を見学。人が密集する都市生活を衛生的にするために、どういったインフラが支えているかを体験します。臭いのきつさを実感してもらうことがまずは大事。小学校のときの見学よりは、ちゃんと処理の原理に対する理解を深めてほしいものです。



多様な卒業生たちの活躍

ごく一部ですが、卒業生たちからのメッセージを紹介しします。この他にも随時、卒業生からのメッセージを Web で紹介していきます。以下のサイトでご覧ください。
(<http://www.wako.ac.jp/wellbeing/obogindex.html>)

★ 進路 ☆ 今の仕事や活動 ※ 学生生活を振り返って ◇ 後輩や教員へのメッセージ



09年入学 増島くん ★ 水泳指導のアルバイトをしながら教員採用試験の勉強中。

☆ ライフセービング活動。主に海やプールでの監視活動。1年間を通してオンシーズン(7,8月)のために練習をしています。一言でいえば、事故を未然に防ぐ活動で、砂浜の清掃活動も行っています。オフシーズンでは地域の小学校では着衣泳教室、中学と高校では海の安全教室を開催。子どもたちに海の楽しさを知ってもらうため砂遊びや波乗り体験もしています。

※ 1年のときに受講した「身体表現とパフォーマンス」。これって授業なのか?という感じでしたが、まさに青春でした。授業以外の時間にも、グループで集まり夜遅くまで練習!メイク、照明係、舞台設営、衣装作りなどなど初体験

ばかり。全てが良い思い出です。また、一番印象に残っている授業は、保健体育科教育法2(藤原先生)です。90分間があったという間。もっと学びたい、もっと知りたいという気持ちで、体がうずうずしていました。

◇ 大学生生活は、あっという間。たくさんの思い出を作ってください。生真面目な学生生活を送った人の方が、後の人生で自身の学生時代を後悔する一方、遊び倒した人は、より幸福な気持ちで人生を過ごすみたいです。笑。僕がライフセービング部を和光大学で作りたいとメールした時に、増島くんが作りたいと思ったなら、もう和光大学ライフセービング部は出来ているよと言ってもらったおかげで矢田先生に顧問をお願いし、大会に出場することが出来ました。

09年入学 青木さん ★ フィットネスクラブ

☆ インストラクター業務が中心の職種に属します。アルバイトスタッフとして3年ほどしか経験はありませんが、「ありがとう」青木さんのおかげで○○ができるようになった、ここに来るのが楽しみなった、目標達成できたなど感謝の言葉を直接いただけるのが好きです。一方で、色々なお客様がいらっしゃるの、時には心がスタボロになるくらいのお言葉をいただくこともあり、大変なこともあります。それに優るやりがいと魅力があります。

※ 和光大学だからこそできる授業の選択と単位の取り方を利用して、他大学のサークルにうつ

てみたり、NYにダンスと英語を学びに行ってみたり、パリにスパトレーニングをうけに行ってみたり、就きたい職に就くための下準備をしたりなど、学外での活動や社会人になる前にやっておきたかったことがたくさんできて、とても満足しています。

◇ 遊びにしても学びにしても、周りに流されても流れなくても、選択肢のたくさんある和光大学で悔いの残らない学生生活を♡「寛容で学生に向き合ってくれる先生の揃っている素敵な学科だったな」と4年間の授業を振り返って感じています。私は念願のやりたい仕事のできる会社に勤めることができました。胸をはって、私なりに全力で仕事のできる「いい女」になれるよう精進していきます。笑

08年入学 OAさん ★ 社会福祉施設(障害者更生施設)

☆ この仕事の好きなところは、とにかく仕事をしていて楽しいことです。一方で、様々な障がいを持つ利用者が生活しているなかで、それぞれ支援の方法が異なり、各利用者と自分との関係性によっても支援の仕方が変わってきます。その関係性を築き上げることが難しいです。

※ 毎日が充実していて楽しかった。先生も友達もみんな自分にとって大きな出会いだったと思います。この出会いを今後大切にしていきたいです。

◇ 学生生活4年間、自分次第でいろいろ変わると思う。できるうちにいろんなことに挑戦してもらいたいです。大学の研究室は第3くらいの実家だと思っています。また、元気な姿を見せに行きます!

08年入学 山本くん ★ 外資系生命保険業。

☆ 単なる営業ではなく、資産運用や相続の問題までコンサルティングする仕事です。自分のテーマとしては、生命保険を通じてお客様の人生の質の向上に寄与するという考えに基づき活動中です。専門職なので大変ですが、やりがいと使命感のある仕事なので、日々奮闘中です。

※ 入学した際に、1.2年で卒業単位を取得し3.4年で好きな事を学ぶというスタイルを目指してやっていたので、1.2年では卒業単位を中心に、3.4年では興味のある経済学などの授業を選択していました。周りに甘い学生が多かったのですが、流される性格ではないため予定通りにこなせたかなと思います。そして、サークルにも力をそそいでいたので、リーグでいい結果が残せた事がすごく今の自信にもなっています。

◇ 「どの大学に行くか、何をやるか」よりも「どう過ごすか」という事が何よりも大切だと実感しています。周りの環境に感謝する事を忘れず、今の自分に誇りを持って、就活や今後の人生で必ず良い方向に向かうと思います。

Catch the moment!

08年入学 猪又くん ★ 総合リサイクルショップの店舗スタッフ。

☆ 主にバイヤーとして商品の仕入れ、売場作り等を担当していて、普通の販売業とは少し違った仕事をしています。リユースという形で使った品物のたどり着く末を自分が決められるところに楽しさを感じています。

※ もっと海外へ行って世界を見たかったです。社会人になるとお金はあるけど、自由に使える時間が少なくなります。海外は長期の休暇を休まなければいけないので、ある程度時間に自由がある学生時代にも、もっと世界を見てたくさんの文化を感じたいと少し後悔しています。

◇ 和光大学は自由で他とは違う大学です。あらゆる学科の講義が受けられ、興味があればなんでも学べます。私自身、W学科に在ながら、芸術の講義を受けたり、経済の講義を受講したりしていました。そして、学生と教授の距離が近いのも和光大学ならではと感じました。



09年入学 植木くん ★ 中学の国語教師。(非常勤で週5)

☆ 多くの生徒と毎日接するので、それぞれの生徒のことをしっかり考えてあげられるのがポイントになるでしょう。これは大変なことでもあり、この仕事の好きなところでもあります。

※ 4年前期までは、ひたすら様々な試験勉強や実習に時間を費やしてきました。学年が上がるに連れ、素晴らしい先輩が増えていき、大学生活という濃密なイベントを最高に楽しく過ごせました。そのなかで、自分に対して素直になり、周りの人のことにもしっかりと目を向けることができるようになったと思います。もちろん、自分一人ではなく、たくさんの仲間を支えてもらい、時には支えてあげながら今日まで来ることができました。本当に皆に感謝です。こ

の4年間でこの先の人生でもずっと大事にして、将来は息子、孫、ひ孫...と学生生活の自慢話をして行きたいです。

◇ 大学生生活では常に挑戦する気持ちが大事だと思います。まして和光大学に入学してきたのですから、挑戦しないともったいない。自分は、入学当初は和光大学の良さなんて全然知りませんでした。でも今では和光大学の良さのおかげでステップアップできたと思っています。入学の時の面接で何もしゃべれず大橋先生に助けってもらったことが記憶に新しいです。堂前先生も優しく質問してくださったので助かりました。教授と学生の距離が近くて学びやすい環境であることを学年が上がるごとに感じていました。



08年入学 石川くん ★ 日本橋にある商社の営業。

☆ 大手企業から町工場や商店まで、多様なユーザーを相手に、主に工業素材及び資材を納入しています。「営業」という仕事の中で感じるのは自由さ。お客さんが求めるものなら何でも取り扱う事ができる、何でも提案できる。探し方は問われない、という点でとても自由度の高い職種なのだと感じます。しかし、自由であるが故に自らアクションを起こさない限り何も始まらない。そこに理由や根拠がなければ誰も相手をしてくれない。常に頭を回転させてアンテナを張り巡らせて、フットワークを軽くして、そんな毎日に大変さを感じる事もあります。

※ 自分にしてはさまざまなことによく首を突っ込んだなと思っていますが、そこからもう1ステップ踏み込めばもっと面白くなっただろうに...、と今更反省。教育実習に関しては準備が足りなかった(心も、知識も)。関東リーグに関しては練習の量と質が足りなかった。遊びに関しては行動範囲が足りなかった。でも、大学にいる時間は本当にかけがえのないものになりました。

◇ 遊びも学びも全力で。メリハリを持って。頑張っているとときも頑張っていないときも必ず理由を持ってそうすること。生産性のある毎日を送ってください。お固い大学の教授像からは良い意味でかけ離れたWの先生方。その距離感が本当に温かくて居心地が良かった。愛のあるご指導、本当にありがとうございます。

学科ホームページあります！ Facebook やってます！

W 学科の情報は Web でも随時発信しています。是非ご覧ください。



W 学科ライブページ
(<http://www.wako.ac.jp/wellbeing/>)



学科関連のオリジナルページです。即時性は facebook に劣りますが、在学生向けのダウンロードできる資料もアップすることがありますし、W 新聞やシンポジウムの報告書などもここから閲覧やダウンロードが可能です。

W 学科 facebook
(<http://www.facebook.com/Wako.Wellbeing>)



W 学科に関連した行事などを、多くは写真付で随時アップしています。在学生も意外に見えていない行事もあるはず。是非、「いいね！」をして、せっかくすごしている環境の情報を見逃さないようにしましょう。



地域・流域共生センター ホームページ
(<http://www.ryuki-wako.jp>)



大学周辺地域との協力関係を活かした環境教育、地域貢献は 2008 年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」(教育 GP) に採択されました。これにより「和光大学 足もとからの環境共生プロジェクト」がスタート、地域・流域共生センターがオープンしました。さまざまなイベントのお知らせのほか、同 HP の「活動ブログ」は W 学科の卒業生が主に発信しています。ぜひご覧ください。

キャンパスの足もとにある豊かな自然



イラスト：W 学科卒業生 斉藤 透 氏

発行：2013 年 5 月 31 日
和光大学 身体環境共生学科

改訂にあたっての編集 / おてつだい：渡辺 美里